

# 熊本城調査研究センター年報 1

平成 25・26 年度

2015

熊本市熊本城調査研究センター

熊本城調査研究センターは、熊本城の適切な保存をはかり、次世代へと継承するため、熊本城の学術的価値や特徴を調査研究して明らかにし、その成果を広く情報発信して文化財としての理解を深めることを目的としています。平成 25 年 10 月に設置され、事業計画にもとづき平成 26 年 11 月には平成 10 年度・平成 12 年度の発掘調査の結果を『熊本城跡発掘調査報告書 1 飯田丸の調査』熊本城調査研究センター報告書第 1 集として刊行いたしました。今後も着実に活動して参ります。

年度ごとに活動を報告し併せて調査研究成果の一端を速報するため、熊本城調査研究センターの年報を今後、定期的に発行いたします。この年報はその第 1 報となります。ご高覧賜れば幸いです。

平成 27 年 5 月

熊本市熊本城調査研究センター  
所 長 渡 辺 勝 彦

本書は、熊本市観光文化交流局熊本城調査研究センターが、平成 25・26 年度に実施した業務の概要を記したものである。







## ．熊本城調査研究センターの設置について

### 1．設置目的

熊本城には、約 78,000 m<sup>2</sup>を有する石垣や 13 棟の重要文化財建造物など数多くの遺構が良好な状態で現存している。また、熊本城に関する絵図・文献資料も数多く残されている。

熊本城調査研究センターは、これらの遺構や資料に関し学術的・総合的に調査研究を行ない、熊本城の価値を明らかにし、次世代へと継承することを目的として、平成 25 年 10 月文化振興課内に設置。平成 26 年 4 月課相当の組織となる。

### 2．主な事業

石垣等の遺構、重要文化財建造物、発掘調査により出土した遺物資料、文献・絵図資料、伝統技術資料等の総合的な調査研究

熊本城に関する文献・絵画・調査研究論文等の資料収集・整理

熊本城への理解を促進するため、調査研究成果について広く情報発信

史跡・保護を目的とした発掘調査と報告書の刊行

復元整備をはじめとした保存整備のあり方の再検証

保存整備計画の策定

### 3．熊本市事務分掌規則による事務分担

熊本城及び城下町の総合的な調査研究に関すること

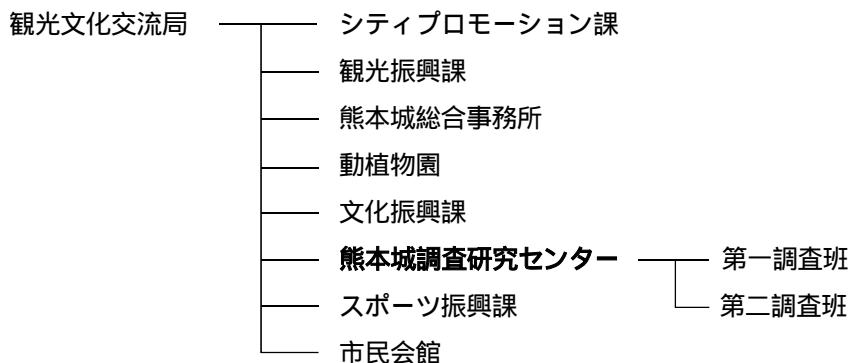
熊本城及び城下町に係る資料の収集、整理及び保存に関すること

熊本城一帯の保存整備計画に関すること

特別史跡熊本城跡保存活用委員会に関すること

## ．組織

### 1．観光文化交流局の組織（平成 26 年度）



### 2．熊本城調査研究センターの構成

平成 25 年度

所長（文化振興課埋蔵文化財調査室長兼務）

清田 稔

主任文化財保護主事

美濃口雅朗（考古）

文化財保護主事	金田一精（考古）	
文化財保護主事	國武真紀子（考古）	計 4 名
平成 26 年度		
所長 平成 26 年 4～9 月（観光文化交流局次長兼務）	田上聖子	
平成 26 年 10 月～平成 27 年 3 月	渡辺勝彦（日本建築史）	
副所長	河田日出男	
文化財保護主幹	鶴嶋俊彦（近世城郭）	
第一調査班 文化財保護主幹兼主査	美濃口雅朗（考古）	
文化財保護主任主事	金田一精（考古）	
文化財保護主任主事	國武真紀子（考古）	
文化財保護主事	木下泰葉（文献）	
嘱託職員	村田理恵（考古）	
第二調査班 主査	古賀丈晴（建築）	
主任主事	益田知子（事務）	
主任技師	田代純一（建築）	
嘱託職員	小多信幸（事務・文献）	計 12 名

### 3. 熊本城調査研究センター施設概要

執務室（65 m<sup>2</sup>） 作業室（55 m<sup>2</sup>） 会議室（43 m<sup>2</sup>） 資料室（18 m<sup>2</sup>） 三の丸作業室及び収蔵庫（263 m<sup>2</sup>）

## . 平成 25 年度の事業

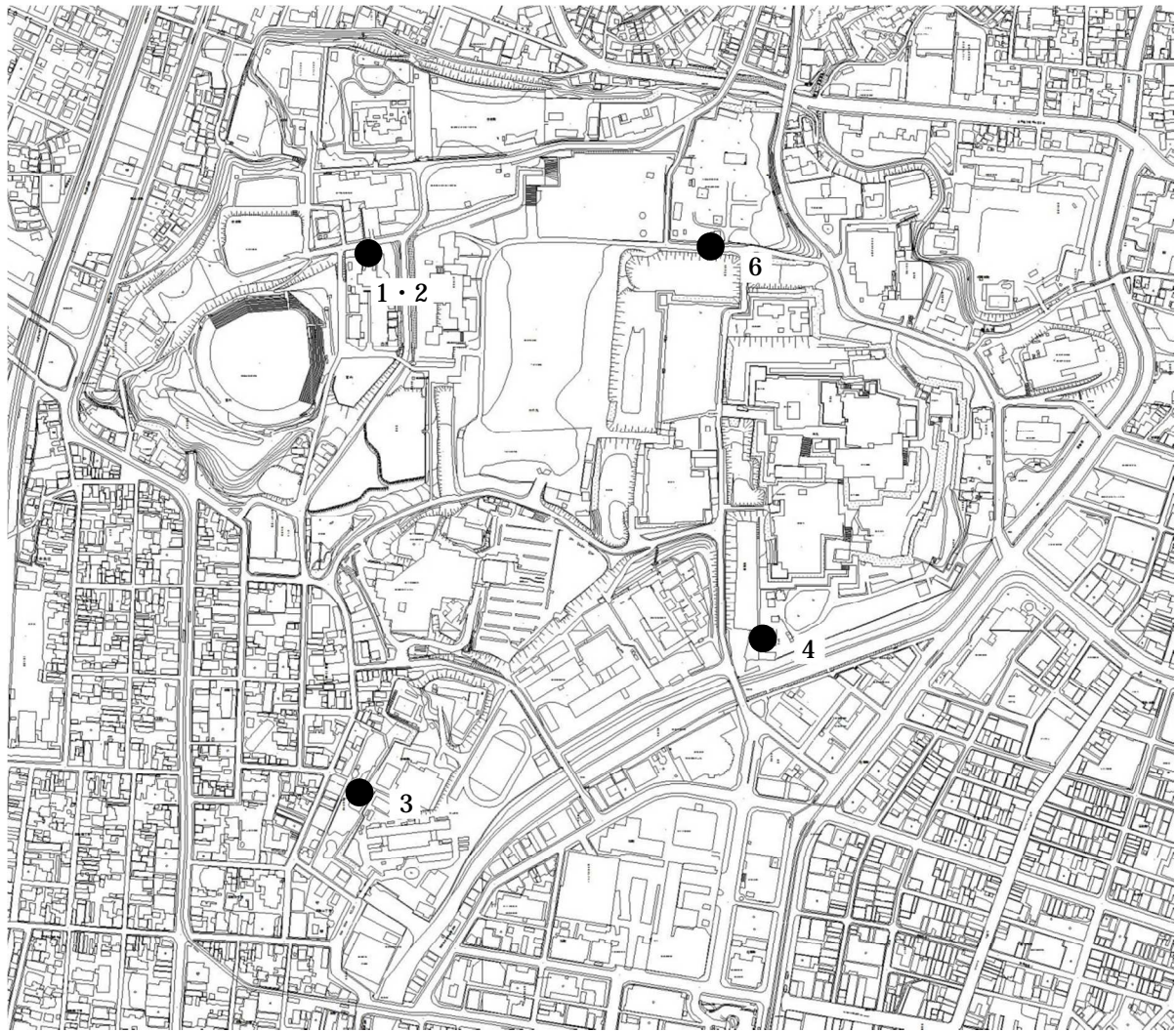
### 1. 概要

平成 25 年 10 月以降の事業としては、発掘調査・工事立会・出土品整理作業を行なう。発掘調査は、熊本市立博物館リニューアルに伴い、館内外のボーリング調査と、増床予定部分を中心とした確認調査を実施。工事立会は、現状変更に伴うもので、特別史跡内で 4 事業の立会を行なった。室内作業として、25 年度上半期からの継続で本丸御殿・飯田丸出土品の整理作業を行なった。

### 2. 発掘調査・工事立会

表 1 平成 25 年度調査地点一覧表

	日時	事業名	特別史跡		文化財 保護法	現状変更		担当課等
			内	外		申請（届出）年月日	許可年月日	
1	平成 25 年 12 月	熊本博物館リニューアル（ボーリング調査）			現状変更	平成 24 年 8 月 7 日	平成 24 年 9 月 21 日	熊本博物館
2	平成 26 年 1～3 月	熊本博物館リニューアル確認調査			現状変更	平成 25 年 8 月 23 日	平成 25 年 11 月 15 日	熊本博物館
3	1 月 7・8 日	古城堀端公園プール撤去工事			現状変更	平成 25 年 9 月 3 日	平成 25 年 11 月 15 日	熊本城総合事務所
4	1 月 31 日	馬具櫓復元整備事業関連工事			現状変更	平成 23 年 8 月 15 日 （当初） 平成 24 年 7 月 10 日 （計画変更）	平成 23 年 11 月 18 日 （当初） 平成 24 年 8 月 15 日 （計画変更）	熊本城総合事務所
5	2 月 4 日	城内座標杭設置			現状変更	平成 25 年 10 月 23 日	平成 25 年 12 月 13 日	熊本城総合事務所
6	3 月 10 日	監物台樹木園整備工事			現状変更	平成 25 年 11 月 25 日	平成 26 年 1 月 17 日	九州森林管理局



平成 25 年度調査地点（縮尺任意、図中の番号は表 1 に対応）

### 発掘調査

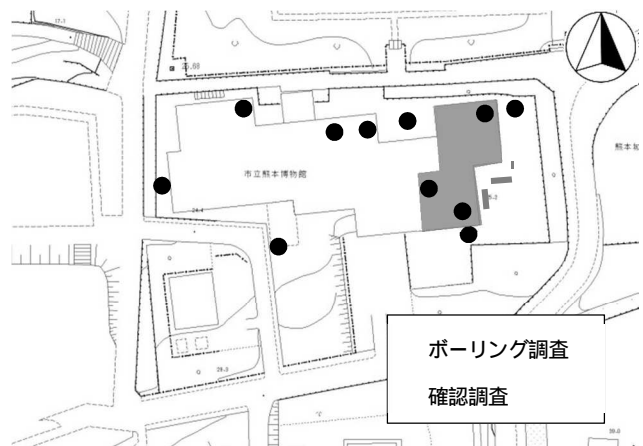
#### （1）熊本博物館リニューアルに伴うボーリング調査

原因：熊本博物館リニューアル（現状変更）

期日：平成 25 年 12 月 16 日～22 日

方法：建物内の深掘り部分や建物外の土層残存状況把握するため 11 箇所にてボーリングによる土層サンプリングを行なった。

成果：敷地は東から西に緩やかに下がる傾斜した地形と判り、建物内外に土層が残存していることが確認された。建物内東側の増床工事予定部分では、地中梁の間が島状に高く残っている可能性が示された。この部分についてトレンチ調査を実施した。



熊本博物館位置図（1/2500）

#### （2）熊本博物館リニューアルに伴う確認調査

原因：熊本博物館リニューアル（現状変更）

期日：平成 26 年 1 月 20 日～同年 3 月 20 日



方法：建物内東側の増床予定部分について、建物基礎間の4m四方を一区とし、事前に1～24区と名称を付した上で、17箇所を調査した。

成果：全体の成果としては、博物館建設時の掘削（層）が浅く、近代の整地層（層）や建物跡、その下には近世（近代含む）の遺構（層）の存在を確認した。博物館敷地は近世の武家屋敷から旧軍による土地利用を経て、戦後国立病院の看護学校だったことがわかっている。武家屋敷時代の地表面は

軍によって削られ（層上面）その上に幾度かの整地を行ない（層）明治末期に軍による大規模な造成（層）が行なわれたようで、その後は博物館建設（層）まで大きな変化は無かったことが確認できた。



## 工事立会

### （3）古城堀端公園プール撤去工事立会

原因：既設プール撤去（現状変更）

期日：平成26年1月7・8日

成果：古城堀端公園は、古城堀を埋立てた公園で、埋立ての規模は県立第一高等学校の石垣裾との高低差から2m以上と判断できる。撤去工事は、平成26年1月7日に開始し翌日の1月8日には完了した。工事立会を行ない、基礎のコンクリートが現地表面から深さ60cm程度までであることを確認した。基礎底面の土も明らかに客土で、古城堀を埋立てた土と判断できた。よって、石垣や堀への影響は無いと判断した。



撤去プール位置図（1/2500）



#### (4) 馬具櫓復元整備事業関連工事

原因：熊本城復元整備計画の第一期として馬具櫓及び続塀の復元整備事業が計画され、平成21年度に発掘調査を行なった。その後、石垣の保存修理・復元建造物建築を経て、平成26年度に竣工した。この馬具櫓復元整備事業関連工事中に随時工事立会を行なった。

・電気設備工事立会

期日：平成26年1月31日

成果：馬具櫓復元建物北西側に避雷針設置のための掘削工事立会を行なった。掘削は直径50cm、深さ60cm程度で、掘削は全て割栗石内でおさまっている。



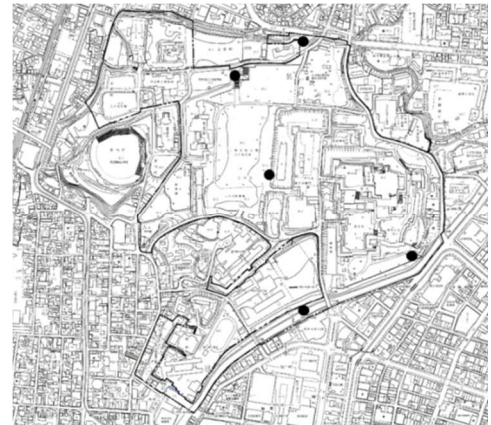
馬具櫓位置図(1/2500)

#### (5) 城内座標設置立会

原因：座標杭設置(現状変更)

期日：平成26年2月4日

成果：城内に座標を設置するため、新規の座標杭を城内に5箇所埋設した。全て復元修理を行った櫓台や、長塀石垣裾の表土内におさまる部分で、遺構への影響は無い。



座標杭設置位置(縮尺任意)

#### (6) 監物台樹木園整備工事立会

原因：監物台樹木園内での現状変更申請は、憩いの広場・観察広場の整備、身体障害者用駐車場の整備ならびに看板設置である。

(現状変更)

期日：平成26年3月10日

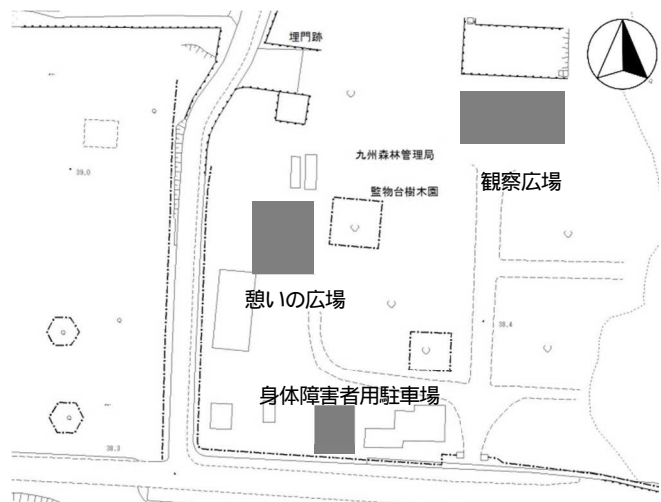
方法：整備に伴い、旧地表面を確認するための確認調査を行なった。確認調査のトレンチは、憩いの広場に3箇所、障害者駐車場に2箇所、観察広場に2箇所の計7箇所設定し土層を観察した。掘削の深さは現地表面から50cm以内としている。

・憩いの広場

成果：以前温室があった場所で、温室撤去後に厚さ20cmの碎石を敷いて整地したとされている。今回は、現地表面から20cm掘削し山砂を敷いて芝を張る工事で、想定では実質温室があった際の表土に山砂と芝生がのる格好になる。工事前に3箇所トレンチを設定し土層を観察したところ、碎石が30~40cmと予想より厚く堆積し、その下も薄い暗褐色土と礫層であった。いずれも現代の堆積で、遺構に影響は無いと判断できた。旧表地表は現地地表下50cm以下のように追認は行っていない。

・身体障害者用駐車場

成果：以前木造の建築物があった部分で、今回



監物台樹木園内調査地点(1/2000)

20cm の掘削を行なうが、旧建物解体時の攪乱層内におさまると想定されていた。工事前に 2 箇所のトレンチを設定し、土層の観察を行なったところ、東側トレンチで平瓦を敷いた遺構が現地地表下 40cm で確認できた。遺構の時期は不明。使用された瓦は近世瓦のようである。

・観察広場

成果：観察広場は現地表面に盛土して芝を張るため、掘削は無い。よって、トレンチの掘削も最小限にとどめた。トレンチは 2 箇所設定した。いずれも現表土下 10～15cm で凝灰岩片・焼土・炭化物を多く含む灰褐色土を検出した。時期は近代～現代であろう。

以上の結果で、今回の工事による遺構への影響はないが、身体障害者用駐車場のように部分的に遺構が浅く残存している可能性があり、慎重に対処する必要がある。



## ．平成 26 年度の事業

### 1．概要

#### (1) 熊本城調査研究事業

##### a．飯田丸発掘調査報告書作成

###### 事業概要

平成 10～12 年度に実施した飯田丸の発掘調査についての報告書を作成した。

###### 成果

『熊本城跡発掘調査報告書 1 - 飯田丸の調査 - 』 刊行

##### b．特別史跡熊本城跡総括報告書（整備事業編）作成

###### 事業概要

特別史跡熊本城跡内で昭和以降に実施した重要文化財建造物の保存修理、復元整備の設計根拠、工程、工事実施仕様等の整備事業を現存する資料と現地調査により総括する報告書を平成 26 年度・平成 27 年度で作成する。

###### 平成 26 年度実施内容

- ・過去の資料の収集、整理。
- ・昭和以降の保存修理、復元整備等、各種計画を年表にまとめる。
- ・復元年代の設定の考え方の整理。

c．史跡内の現状変更に伴う確認調査・立会調査

事業概要

平成 26 年度は 16 件の工事立会を行なった。現状変更に伴うものが 7 件、文化財保護法第 93・94 条に伴うものが 5 件、緊急対応・維持管理に伴うものが 4 件である。熊本城内で掘削工事が行われる場合は、文化振興課・熊本城総合事務所と協議して、少なくとも工事立会を行なっている。

d．発掘調査資料整理

飯田丸発掘調査資料のほか、平成 27 年度報告書刊行予定の本丸御殿跡発掘調査・石垣修理工事に伴う発掘調査資料の整理、平成 26 年度に実施した立会調査資料の整理を行なった。

(2) 熊本城資料収集・デジタル化事業

事業概要

過去に熊本城跡内で行なわれた石垣保存修理、建造物の保存修理、復元、その他整備についての資料を収集し、整理を行なう。また、熊本城調査研究の基礎資料として、情報発信のデータバンクとして活用を図るため、収集資料のデジタル化を進めた。

(3) 文献等史料調査

事業概要

熊本城・城下町に関する総合的な調査研究と報告書作成の基礎作業として、古文書・絵図・古写真等の史資料の所在を確認し、収集・目録化を進めた。平成 26 年度は、国立国会図書館、国立公文書館、防衛研究所、宮内公文書館、東京大学史料編纂所、熊本博物館の史資料を調査した。

(4) 委員会等運営

事業概要

特別史跡熊本城跡の保存と活用について総合的に検討するため、特別史跡熊本城跡保存活用委員会を開催した。

平成 26 年度は、親委員会である保存活用委員会を 1 回、専門部会である計画策定部会を 3 回、史跡・建築部会を 3 回、活用部会を 2 回開催した。

(5) 啓発事業

a．ホームページ公開

事業概要

熊本城調査研究センターの事業成果等を情報発信するために、熊本市のホームページを活用し、当センターの概要、委員会の議事等、刊行物、講演会・研修会報告等を公開している。

更新履歴

8 月 6 日 熊本城調査研究センターHP 立上げ、センター概要、過去の委員会会議録（要旨）

11 月 4 日 所長からのご挨拶、講演会、研修会等を追加

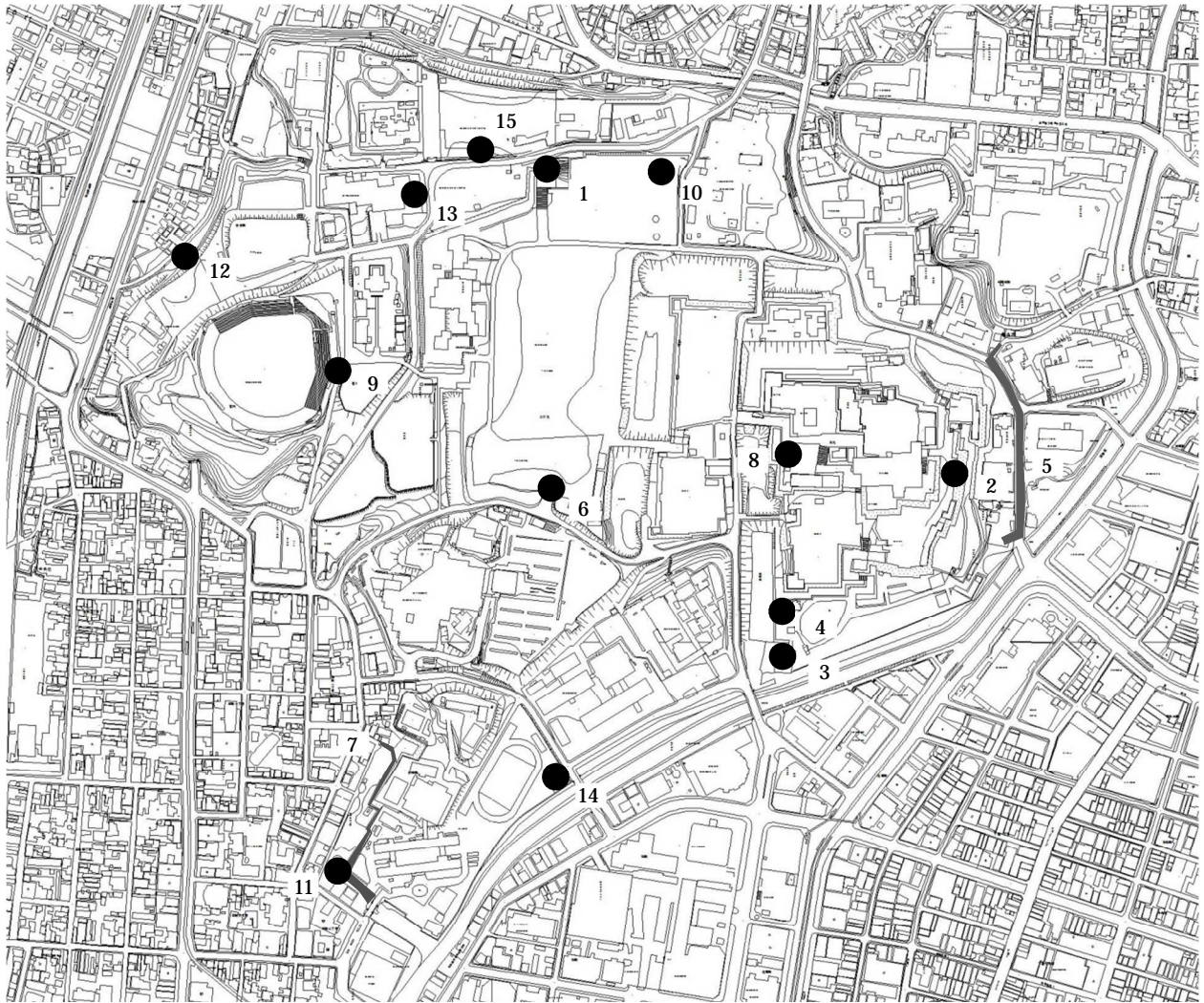
3 月 17 日 刊行物情報を追加、講演会、研修会等を更新

b．講演会、定期講座等

事業概要

熊本城への理解をより深めてもらうため、各種講演会や定期講座などに出演し、熊本城や城下町などについて講演を行なった。平成 26 年度は後出の一覧の通り。

## 2. 発掘調査・工事立会



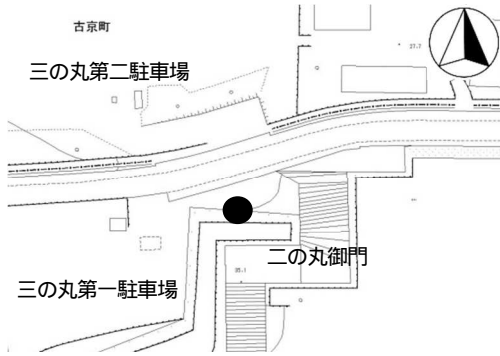
平成 26 年度調査地点位置図（縮尺任意）

	日時	事業名	特別史跡		文化財保護法	現状変更		担当課等
			内	外		申請（届出）年月日	許可年月日	
1	平成 26 年 6 月 5 日	二の丸御門北側陥没復旧			維持管理			熊本城総合事務所
2	7 月 14 日	放水銃設備取替工事			現状変更	平成 26 年 5 月 28 日	平成 26 年 5 月 28 日	熊本城総合事務所
3	7 月 24 日 7 月 30 日	馬具櫓復元整備事業関連工 事（電気設備・遺構補修）			現状変更	平成 23 年 8 月 15 日 （当初） 平成 24 年 7 月 10 日 （計画変更）	平成 23 年 11 月 18 日 （当初） 平成 24 年 8 月 15 日 （計画変更）	熊本城総合事務所
4	7 月 25 日	竹の丸漏水補修工事			緊急対応			熊本城総合事務所
5	8 月 5 日～ 11 月 23 日	稲荷神社前マンホールポンプ場 建設及び配水管埋設工事			現状変更	平成 26 年 5 月 23 日	平成 26 年 7 月 18 日	上下水道局
6	9 月 8・12・ 17 日	二の丸駐車場舗装改修工事			現状変更	平成 26 年 4 月 16 日	平成 26 年 4 月 25 日	熊本城総合事務所
7	9 月 17 日	古城掘端公園水路浚渫			維持管理			西部土木センター
8	10 月 30 日	数寄屋丸便所建替工事			現状変更	平成 26 年 4 月 16 日	平成 26 年 6 月 20 日	熊本城総合事務所
9	12 月 17・ 19 日	県営藤崎台球場防球ネット 設置工事			第 94 条	平成 26 年 8 月 15 日		熊本県体育保健課
10	12 月 18 日	催し広場便所建替工事			現状変更	平成 26 年 4 月 16 日	平成 26 年 6 月 20 日	熊本城総合事務所
11	平成 27 年 1 月 15・16 日	第一高校フェンス改良工事			第 94 条	平成 26 年 12 月 22 日	平成 26 年 12 月 26 日	熊本県施設課
12	1 月 15 日 2 月 2 日	側溝改良工事			第 93 条	平成 26 年 10 月 7 日		民間
13	1 月 22・23 日	熊本博物館漏水補修工事			緊急対応			熊本博物館
14	2 月 13 日	電柱設置工事			第 93 条	平成 27 年 1 月 20 日		九州電力
15	3 月 16 日	電気設備工事			第 93 条	平成 27 年 3 月 6 日		九州電力

(1) 二の丸御門北側陥没復旧立会

原因：二の丸御門北側石垣裾に陥没がみられたため、陥没部分を復旧した。(維持管理)

期日：平成 26 年 6 月 5 日



二の丸御門北側陥没位置図 (1/2500)



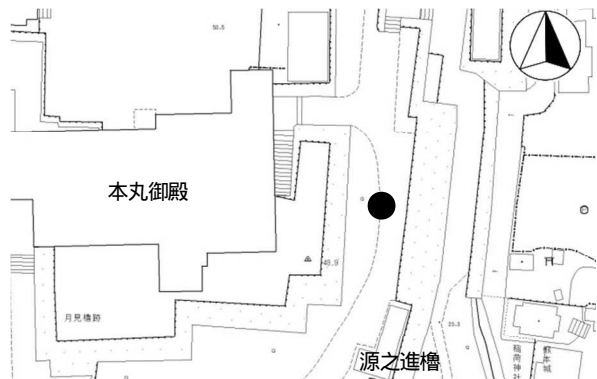
成果：二の丸御門北側の石垣裾で小規模な陥没が確認された。この部分は、平成 8 年度の石垣解体修理に伴い整備された部分で、排水溝と石垣の間に栗石を充填して表土を貼っていた。陥没規模が小規模であり、通行者の安全対策のための維持管理として復旧を行なった。陥没部分を精査したが原因は不明瞭で、石垣や排水溝に影響は無かったため、再び栗石を充填して表土を貼り復旧した。

(2) 放水銃設備取替工事立会

原因：放水銃設備の源之進櫓系統仕切り弁の取替工事の現状変更申請が行なわれた。仕切り弁は設置後 15 年を経過し、老朽化により作動しなくなり、放水銃の放水が困難になっていた。このため早急な取替えが必要となった。(現状変更)

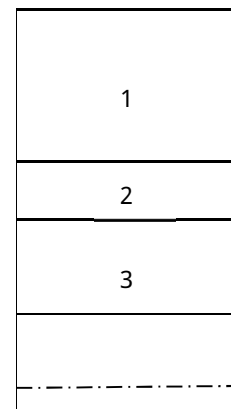
期日：平成 26 年 7 月 14 日

方法：仕切り弁取替は、マンホールまでを掘削していったん撤去する必要があった。掘削が設置時の掘削範囲内で納まるため工事立会を行なった。掘削は小型コンボを使用して行なわれた。



放水銃設備取替位置図 (1/2500)

成果：マンホールの周囲を掘り下げたところ、マンホールに沿う形で東側に給水管と消火栓、西側に電線が確認された。これらを保全しながら工事を行なうために、掘削は当初の 1.8×1.8m 四方から、2m 四方に拡大された。掘削はマンホール・配管・配線設置時の掘削範囲に納まってはいるが、南側でわずかに土層が残存した部分がみられた。土層の観察では、現地表から 42cm は大量の砂利や瓦片を含む攪乱層 (1 層) で、その下で非常に硬くしまった土 (2 層) を確認した。2 層の上面は、1 層と明瞭に分離する点、2cm ほどの厚さで分離する点から、旧表土の可能性はある。2 層は全体で 15cm 前後の厚さ。2 層の下は粘性の強い暗褐色土 (3 層) で、瓦片をまばらに含む。2・3 層ともに小砂利をわずかに含み、3 層には焼土・炭化物粒がわずかにみられた。



土層柱状図 (1/20) 地表面は標高約 36m

遺物は、2 層は無遺物、3 層は瓦小片のみで、時代を決定できるものは出土していない。

以上の結果で、今回の工事による遺構への影響はないが、配管・配線が狭い範囲に集中して埋設されている

ことが確認できた。各配管・配線もいずれ更新の必要性が出てくるため、慎重に対処する必要がある。



### (3) 馬具櫓復元整備事業関連工事

原因：熊本城復元整備計画の第 期として馬具櫓及び続堀の復元整備事業が計画され、平成 21 年度に発掘調査を行なった。その後、石垣の保存修理・復元建物建築を経て、平成 26 年度に竣工した。この馬具櫓復元整備事業関連工事中に随時工事立会を行なった。

#### ・電気設備工事

期日：平成 26 年 7 月 24 日

成果：馬具櫓への電線引き込みと避雷針設置のために馬具櫓裾を掘削した。避雷針は、銅板と銅棒の設置で、銅板設置部分のみ深く掘削した。掘削位置は、馬具櫓東裾で、整備の排水溝の北側。掘削規模は東西約 1m、南北約 90cm で深さは 1.8m。断面観察では、表土の攪乱層以下に 6 層の整地層を確認した。現表土を 1 層として各層の概要を記す。

1 層 攪乱層 コンクリ塊・レンガ片・瓦片を含む。厚さ 45～50cm。

2 層 暗褐色土 粘性強いが砂質感も強い。灰褐色土、褐色粘質土含む。厚さ 25cm。

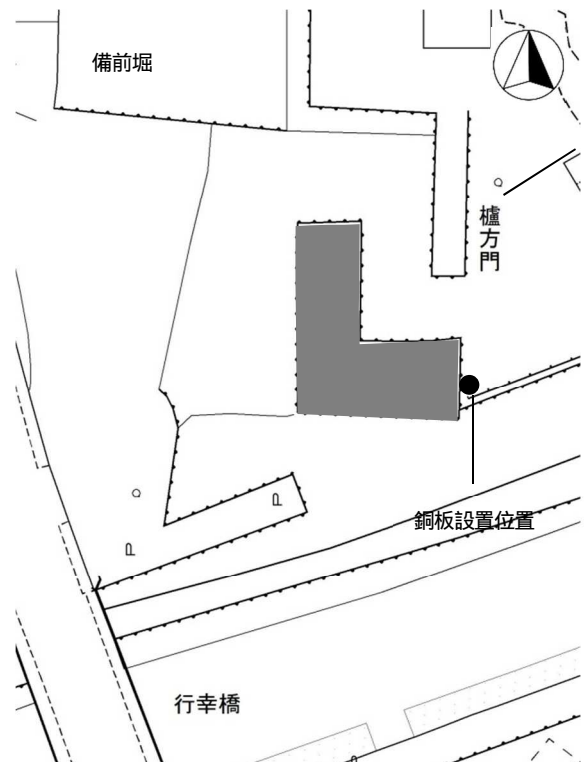
3 層 暗褐色土 灰色土多い。砂質感強い。厚さ 5～13cm。

4 層 灰色土 凝灰岩の風化土か。小礫多い。厚さ 20～23cm。

5 層 褐色粘質土 粘性強い。砂質感もある。厚さ 25cm。

6 層 黒褐色土 粘性強い。しまり強い。上面には明瞭な硬化面がある。硬化面上には白色の粘質土が薄く堆積している。混入物多い。厚さ 40cm。

7 層 暗褐色土 粘性強い。6 層下でわずかに確認できた。



馬具櫓位置図 (1/1000)

以上である。6 層以外はそれほどしまっていない。2 層以下は遺物が出土していないため時期の限定が難しいが、山崎口冠木御門の礎石が現表土に露出していることから、周辺も大規模な埋立てによる整地は無かった可能性が高い。よって、1 層が近現代の層であれば、2 層以下は江戸期の層と考えられるであろう。2～5 層につい

では、各層の差は明確だがこの間に画期は見出せなかった。連続した整地層か。6層上面では硬化面がみられたことから、この部分がある時期の地表であった可能性が高い。現地表面下1.3~1.4mで、標高は約12.5mである。竹の丸一帯は旧白川の流路を埋め立てて造成したと考えられており、今回確認した整地層も築城時の可能性が高いと考えるが、2~5層と6層以下の少なくとも2時期に分かれるようである。

今回掘削した部分の現地表面が標高14mであり、確認した硬化面が12.5m前後とすれば、馬具櫓櫓台と長塀の石垣が噛み合って連続している高さ(約12m)に近い。

この石垣の噛み合いについては、長塀構築前に低い石垣があった可能性が指摘されている。硬化面はこの頃の地表面であった可能性もある。

工事については、銅板設置以外の掘削は、現地表面内でおさまったため遺構への影響は無いと判断した。ただし、銅棒については1m以上打ち込んでおり、撤去時は注意する必要がある。



銅板設置部分掘削状況

・V字状遺構補修工事

期日：平成26年7月30日

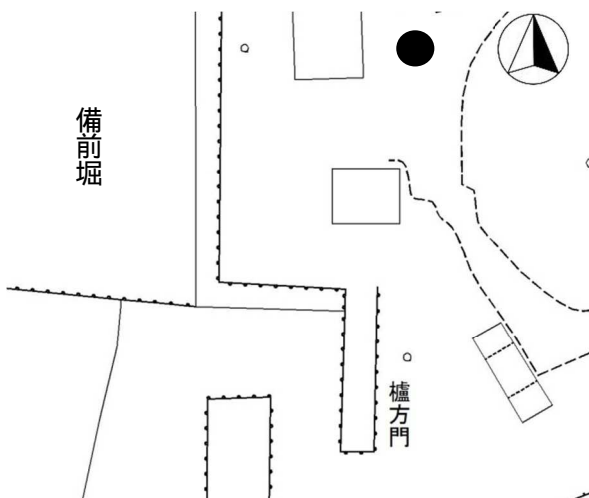
成果：V字状遺構について、欠損部分の補修工事立会を行なった。欠損部分は、遺構と同じ凝灰岩により補足している。

(4) 竹の丸漏水補修工事

原因：櫓方門内作業所前の水道点検坑付近での漏水。(緊急工事)

期日：平成26年7月25日

成果：掘削は水道管理設溝内で納まり、遺構への影響は無いと判断した。



竹の丸漏水箇所位置図(1/1000)





(5) 稲荷神社前マンホールポンプ

場建設及び配水管埋設工事立会

原因：県道四方寄熊本線下水道施設  
及び下水管埋設工事（現状変更）

期日：平成26年8月5日～平成26  
年11月23日（延べ27日）

面積：約160㎡（幅90cm，延長約  
180m）

方法：生活道路延長180mを対象と  
するため、調査により長期間封鎖す  
ることが困難であること、掘削幅は  
原則90cmと狭いことから原則工事  
立会とした。調査は夜間に実施した  
ため、明るさや時間に制限があり、  
土層観察については掘削壁面全域  
を精査せず、残存状況の良好な箇所  
について行なった。

成果：

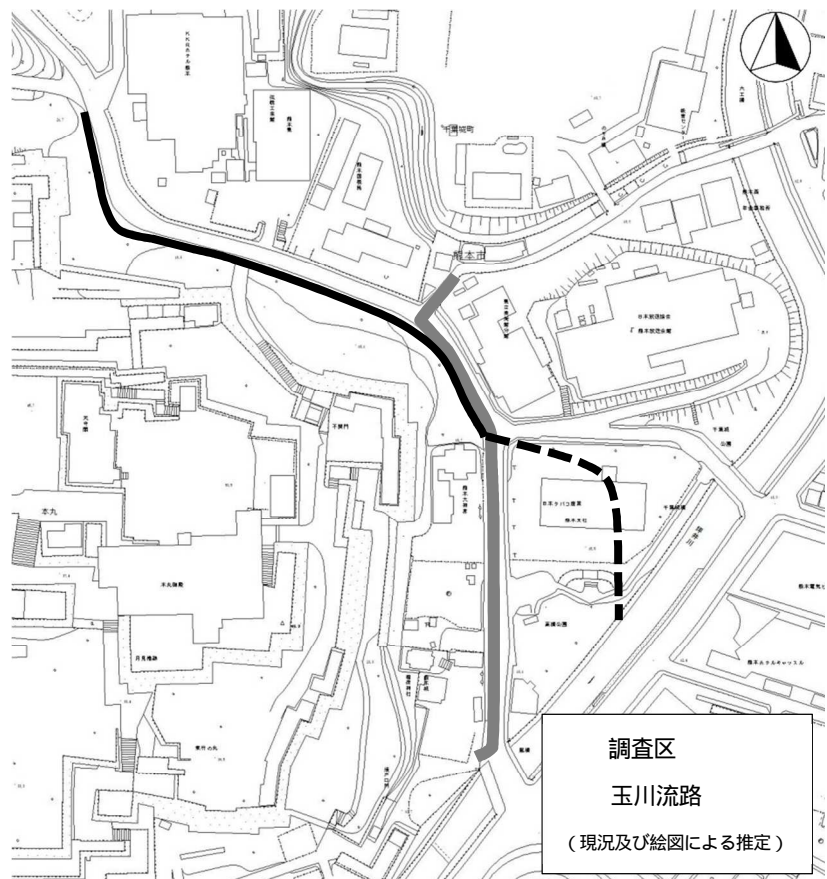
a. 土層堆積と旧地形想定

調査対象地は、熊本城の南東側を  
流れる坪井川により形成された緩

扇状地と熊本城が立地する茶臼山丘陵裾部との境部分に位置する。土層はこれを反映しており、緩扇状地に起因するものと茶臼山丘陵に起因するものの両者が認められた。土層観察は37箇所において行なった（ポイント1～37）。以下、標準土層を記すが、同質の土層でも調査ポイントによってバリエーションがあるため、概略を記したものであることを付記しておく。

- 1層 道路舗装（1a層：アスファルト，1b層：砕石）。
- 2層 現代の整地・埋没土。砕石・塩化ビニール管などを含む粗い土質。
- 3層 近現代の整地・埋没土。レンガ・コンクリート塊などを含む粗い土質。
- 4層 舗装以前（近代）の旧道路。上面が硬化する路面と路面下部の砂礫を含む整地層。
- 5層 暗褐色粘質土。近世以降の堆積。5'層は風化凝灰岩ブロックを多量に含む。
- 6層 グライ土層。粒度が細かく均質で酸化鉄斑が認められる。
- 7層 粒度の細かい砂質土層。粘性強い。7'層は火砕流堆積土ブロックを多量に、7''層は風化凝灰岩ブロックを多量に含む。
- 8層 硬質粘土層。縄文時代後期前半（海退期）の堆積土に該当する。
- 9層 黒色泥土層。均質で粒度が細かい。縄文時代前中期の堆積層。
- 10層 火砕流堆積土ブロックを基質とする二次堆積層。
- 11層 風化凝灰岩粒・同ブロックによる二次堆積層。

6層（グライ土層）・7層（砂質土）・8層（硬質粘土層）・9層（黒色泥土層）は緩扇状地形に起因し、10層（火砕流堆積土二次堆積層）・11層（風化凝灰岩二次堆積層）は茶臼山丘陵に起因する土層である。8・9層の堆積時期は、市域における同じ地形環境の調査成果より判断している。これらより上部の土層では、5層が目される。近代以降の土層（2～4層）よりも明らかに粒度が細かく均質であり、ポイント12においては近世瓦片が出



下水道管埋設工事位置図（1/4000）



土している。本層以下は明らかな保護対象と捉えられる。

各ポイントの土層の比較から旧地形を想定する。道路が「く」字状に曲がる部分（ポイント26～31付近）においては丘陵裾部が張り出しており、現状地形においても上部が削平されてはいるものの、一部、その痕跡が認められる。その南側は緩扇状地が広がるが、本来、8層（硬質粘土層）の上部に存在すべき褐色砂質土層・オリーブ褐色砂層等が認められないことから、大きな削平を受けていることが明らかである。また、ポイント9～11付近においては小支谷が入り込んでおり、微地形変化も認められる。ポイント1～6については近代以降の埋没土（2・3層）が厚く堆積しており、これは現在の坪井川護岸工事に伴う開削によるものと考えられる。

#### b．検出遺構と調査経過

10月15日、熊本城の水路である「玉川」の護岸石積みを確認した（ポイント26）。そのため、工事を中断し、翌16日、工事担当者（市水道局下水道整備課・日栄土木株式会社）熊本県文化課と調査方針・工法変更について協議し、同日夜、遺構の露出・記録を目的として、改めて体制を整えて調査を実施した（ポイント27）。なお、当初の工事掘削予定は「玉川」護岸石積みに影響が及ぶものであったが、この部分については掘削深度を浅く変更して現状保存を図った。

「玉川」は、正保城絵図と推定される「平山城肥後国熊本城廻絵図」以降の絵図には記載が認められる「水とおし溝」であり、部分的にはあるが現存する遺構である。今回調査（ポイント26・27）の玉川は現存流路の延長上において、これを斜めに横断する形で検出している。

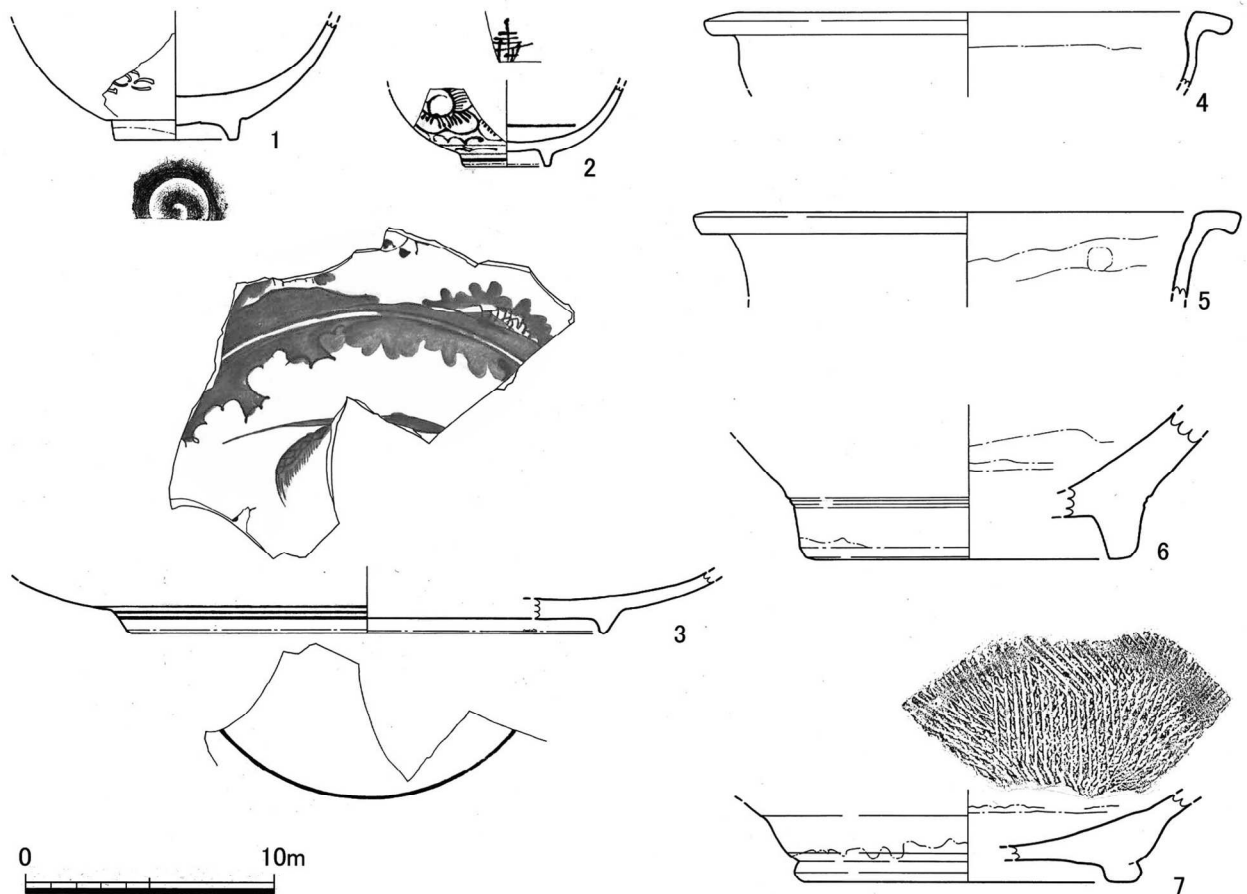
掘り込みは、11層（風化凝灰岩二次堆積層）・7”層（風化凝灰岩ブロックを多量に含む砂質土）を基盤とし、検出上端幅は3.4mである。検出面下約70cm（現地表面下1.1m）以下において、1.5m前後の幅にて安山岩石材の並びを検出している。そのうち南側は加工度の高い長方体の切石が並んでおり、玉川南岸の護岸石積みが残存するものと判断される。特別史跡内であることを考慮して、検出面以下の掘り下げは行なわなかったが、下部にも数段の石積みが想定される。北側の安山岩切石は、配置の状況やその下部に瓦片・漆喰片を含む土が入り込んでいた状況から、護岸用石材ではあるものの、原位置を動いていると判断される。埋土は間隙性が高く、混入物が多い土で、3層（近現代の埋没土）に近似する。

#### c．出土遺物

遺物は重機掘削に伴って採集したが、掘削土はそのままダンプに積まれてしまうため、採集できたものは僅かであった。ポイント27の「玉川」調査は、手掘りにて行なったこともあって、少量ながら遺物が採集できた。陶磁器・瓦片が認められ、石積み裏込め層からの出土量が目立つ。裏込め層出土の陶磁器片は18世紀末～19世紀中頃の所産が主体で、明らかな近代以降のものは認められない。

#### d．まとめ

「玉川」は、少なくとも17世紀中頃には浚渫されていた水路である。今回検出部分は、出土遺物の様相より江戸時代後期の19世紀代に改修したものと考えられる。埋没時期については、埋土の質に加え、以下の理由から明治13年の可能性が指摘できる。明治13年版「熊本全図」をみると、当該地（ポイント26・27付近）とその下流側においては「玉川」の記載は無く、さらに江戸時代の絵図とは大きく改変され、現在と同じ地割りとなっている。それは、同年、この部分に工兵營が移転設置されたことによるものと想定される（ちなみに、現在は「J」熊本敷地となっている）。この地割り改変に伴って、「玉川」が現県道歩道部分に付け替えられたと想定され、それは今回調査の成果とも符合するものである。



下水道管理設工事立会実測図 2

稲荷神社前マンホールポンプ場建設及び配水管埋設工事立会 出土遺物観察表

は出土遺物実測図に対応

	出土位置		器種	産地	年代	備考
	ポイント	遺構・出土層				
1	27	「玉川」裏込め層	陶器碗	八代	18c 末 ~ 19c	胎土暗灰色，白象嵌・灰釉，器面暗緑色
2	27	「玉川」裏込め層	磁器染付碗	肥前系	18c 末 ~ 19c 前半	文様素描き
3	27	「玉川」裏込め層	磁器染付皿	肥前	17c 後半 ~ 18c 前半	内面主文は鶴
4	27	「玉川」裏込め層	陶器鉢	小代 or 福岡	18c 末 ~ 19c	藁灰釉，内面露胎
5	12 付近		陶器鉢	小代 or 福岡	18c 末 ~ 19c	植木鉢カ，藁灰釉，内面鉄漿塗布
6	12 付近		陶器鉢	肥前カ	18c 後半 ~ 19c 中頃	胎土赤褐色 ~ 灰色，土灰釉，内底砂敷き
7	不明		陶器搦鉢	肥前	18c 末 ~ 19c 中頃	外面鉄釉，砂敷き窯詰め技法

(6) 二の丸駐車場舗装改修工事立会

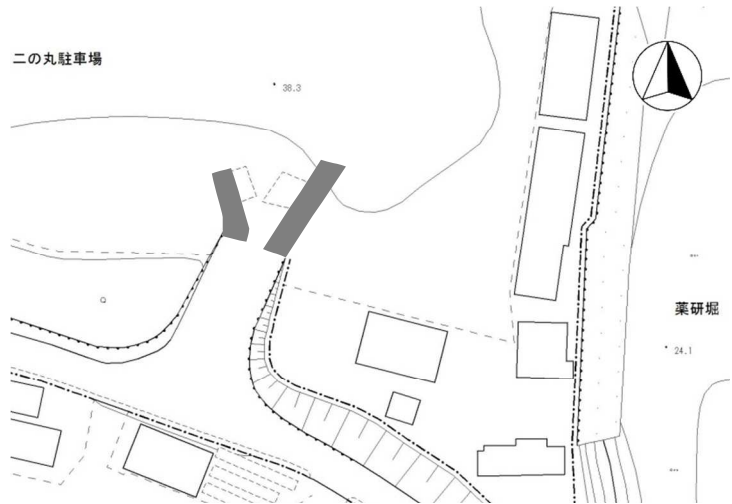
原因：二の丸駐車場ゲート付近の道路舗装工事。(現状変更)

期日：平成 26 年 9 月 8・12・17 日

面積：149 m<sup>2</sup>

方法：工事による掘削深は、現地表面以下約 40 cm であり、工事立会をもって対応した。

成果：工事立会は 3 回行なった。A 区(9 月 8 日) B 区(9 月 12 日) C 区(9 月 17 日) と呼称する。標準土層は以下の通りであり、工事による掘削深は現代の堆積土中に収まっている。



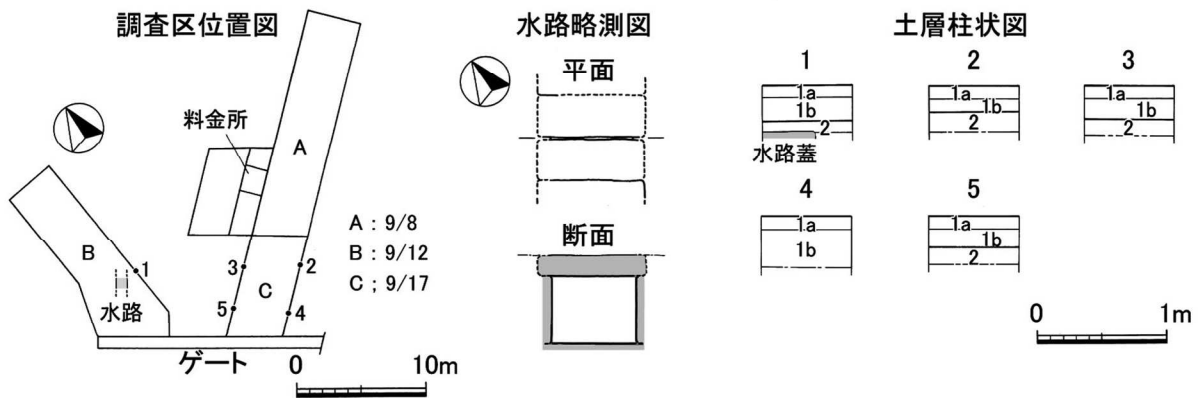
二の丸駐車場工事位置図 (1/1500)

1 層 a はアスファルト、b は碎石層。

2 層 暗褐色土 (10YR3/3)・暗褐色土 (10YR3/4) 火砕流堆積土ブロック・炭化物粒多い。他、碎石片・近現代の瓦片・ガラス・ビニール片を含む。締り強い。

2' 層 明褐色土 (7.5YR5/6) 2 層と同質で火砕流堆積土を基質とする。締り強。暗褐色土ブロック (10YR3/4) 黒褐色土 (10YR2/3) を多く含む。

A 区では、掘削基底面において 30~40 cm 角大の安山岩礫の上面が 3 個検出され、うち 2 個は、略正方形に粗く整形されたものであった。規則的な配置は認められなかった。



二の丸駐車場舗装改修工事立会実測図

B 区では、掘削基底面において水路の石蓋上面を検出した。平面規模約 85 × 30 cm の長方形の安山岩製板石が 4 枚並ぶもので、それらの延長は未検出である。水路本体は、石蓋間の隙間から確認したところ、凝灰岩製板石をコ字形に組んでおり、その内法は幅約 65 cm、高さ約 50 cm であった。なお、舗装工事は検出した石蓋をシートで養生したうえで実施した。

C 区では、遺構等は認められなかった。

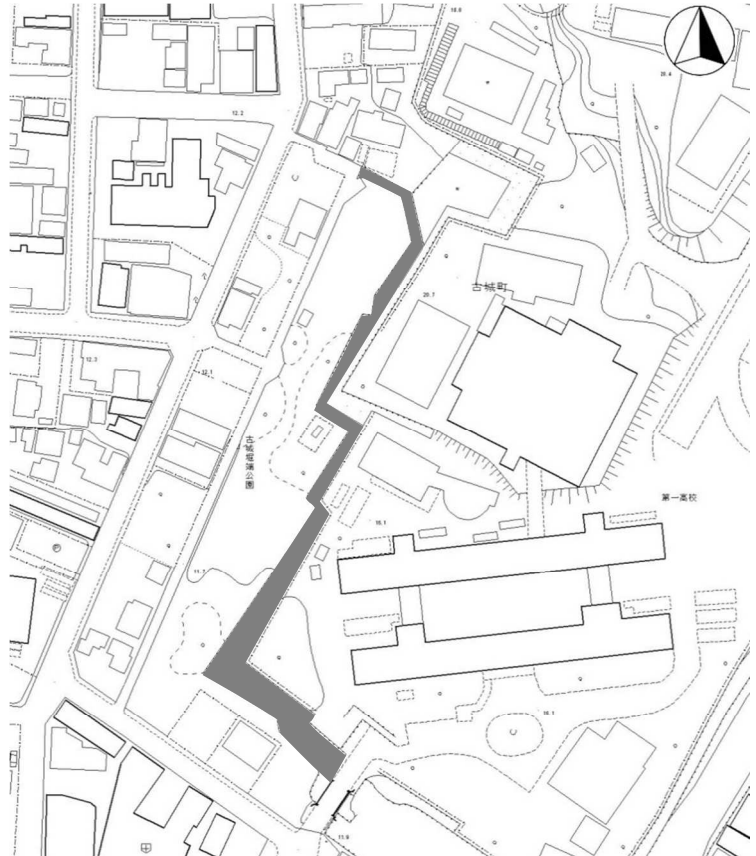
出土遺物は、C 区において同一個体とみられる近現代の鉄釉大甕片数点を挙げられるのみである。

### (7) 古城堀端公園水路浚渫立会

原因：水路浚渫（維持管理）

期日：平成 26 年 9 月 17 日

成果：古城堀端公園と県立第一高等学校の間にある水路の流れを改善するために浚渫を行なった。特別史跡内だが、古城堀を現代に埋立てて作られた水路の浚渫であり、維持管理の範疇として現状変更許可申請は行っていない。ただし、浚渫に当たっては、現場で浚渫に立会い、第一高校側石垣に影響しないように施行業者に再三指導を行なった。



古城堀端公園水路位置図（1/2500）

### (8) 数寄屋丸便所建替工事立会

原因：便所建替（現状変更）

期日：平成 26 年 10 月 30 日

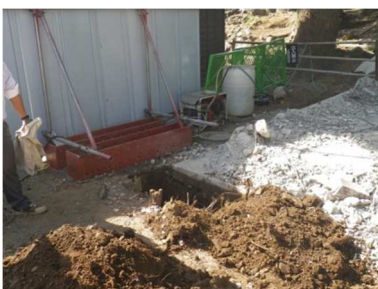
方法：数寄屋丸の建替え便所基礎が既存便所掘形内で収まるため、既存便所基礎の解体の際に工事立会を行なった。

成果：建物の周囲を 4 箇所掘削したところ、現代の表土下に整地層を確認した。瓦を含む層や風化凝灰岩の 2 次堆積層であるが、時期は不明瞭。いずれも既存建物建築時の掘削壁面で、今回の建替え便所の掘削はこの内側で



数寄屋丸便所位置図（1 / 2500）

納まるため、先の整地層や遺構への影響は無いものと判断した。後日（11 月 26 日）放水銃の移設に伴う立会を行なったが、これも既設配管の掘形内で収まること確認されたため、遺構への影響は無いものと判断した。



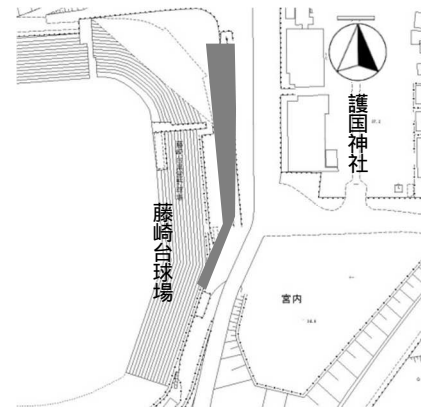
(9) 県営藤崎台球場防球ネット設置工事立会

原因：防球ネット設置（文化財保護法第94条）

期日：平成26年12月17・19日

方法：県営藤崎台球場三塁側球場外に防球ネットを設置するための工事が行なわれた。平成26年7月28日に行なわれた県文化課による確認調査で、遺構残存の可能性は低いと判断されたため、掘削工事時の立会を行なった。

成果：県文化課・体育保健課と工事立会を行った。防球ネットの杭掘削を確認したが、表土の下は阿蘇3・4火砕流で、遺構の残存はない。南端で近世の遺物を多く含む土層がみられた。絵図・地図等で確認して、近代の軍により造成された土であり、現位置ではないと判断された。



防球ネット位置図（1/3000）



(10) 二の丸催し広場便所建替工事立会

原因：便所建替（現状変更）

期日：平成26年12月18日

方法：催し広場の建替え便所基礎が既存便所掘削形内で収まるため、既存便所基礎の解体の際に工事立会を行なった。

成果：建物の周囲を8箇所掘削したところ、大半が現代の攪乱層で、一部現代の可能性が高い整地層を確認したにとどまった。いずれも既存建物と当時埋設された便槽などによるもの。今回の建替え便所の掘削はこの内側で納まるため、遺構への影響は無いものと判断した。



催し広場便所位置図（1/2500）



(11) 県立第一高校フェンス改良工事立会

原因：破損フェンス取替え（文化財保護法第94条）

期日：平成27年1月15・16日

方法：県立第一高校南西端のフェンスが倒木により破損したため部分的な取替え工事が行なわれ、熊本県文化課とともに工事立会を行なった。

成果：フェンスは特別史跡の範囲を保護するため、石垣上端から2m以上内側に設置されている。よって文化財保護法第94条での対応である。取替え工事は、基礎部分も現状のものを抜いて、新設する予定であったが、基礎が深かったため抜かずに現状のものを再利用することになった。県文化課と協議をして、新規の掘削も無く石垣等への影響は現状以上には無いと判断した。



フェンス改良位置図（1/2500）

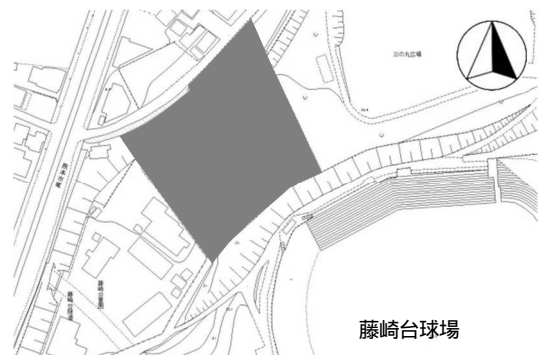
(12) 側溝改良工事立会

原因：側溝改良（文化財保護法第93条）

期日：平成27年1月15日、2月2日

方法：県営藤崎台球場北西側の民地で側溝改良工事が行なわれた。工事は既存の側溝・雨水枡・導水管の取替えと整備で、地形の改変や新たな掘削は無いため、工事立会を行なった。

成果：既存の雨水枡や導水管部分取替えを確認したが、掘削は設置時の掘削内に収まっていた。遺構への影響は無いものと判断している。



位置図（1/4000）



(13) 熊本博物館漏水補修工事立会

原因：熊本市立熊本博物館敷地内における埋設水道管の漏水に伴う緊急工事（緊急対応）

期日：平成27年1月22・23日

面積：約1.7㎡

方法：緊急対応であることに加え、掘削幅が約60cmと狭いことから工事立会をもって対応した。

成果：掘削は、漏水した箇所を狙い、水道管の方向に沿うように行なった。掘削深は地表面下約85cmで、



博物館漏水地点（1/2000）



管の基底がほぼ露出したところで掘り止めている。掘削部分は水道管理設時の埋土内に収まっていた。漏水により丁寧な観察はできなかったが、以下に土層注記を記す。

彩度が低い暗褐色土(10YR3/3) 粒土が粗くザラザラした質感で、不均質な土質。黒褐色土ブロック・砕石・転礫を多く含む。

掘削土中から多量の遺物を採集した。多くは近現代の陶製土管片であり、他、江戸期の陶磁器類も認められた。



#### (14) 電柱設置工事立会(支線アンカー埋設)

原因：電柱補強(文化財保護法第93条)

期日：平成27年2月13日

方法：県立第一高校校長官舎東側の既設電柱に対して、補強ワイヤー取付用アンカー埋設工事が行なわれた。掘削規模が小規模であるため、埋設工事の際に立会を行なった。

成果：周辺では過去に第一高校道路沿いのフェンス設置に際して県文化課と工事立会を行なっている。第一高校グラウンドと合同庁舎間の道路は、盛土により築造されているようで、近世・近代の層まで到達する工事は無い。今回の工事は、平面25cm四方程度を深さ80cm掘り下げて、底面にアンカーを打ち込むものである。80cm掘削した結果、底は山砂混じりの土であり、盛土であると判断した。底面以下は打ち込みであり、土質は観察できていない。



アンカー埋設位置図(1/2500)



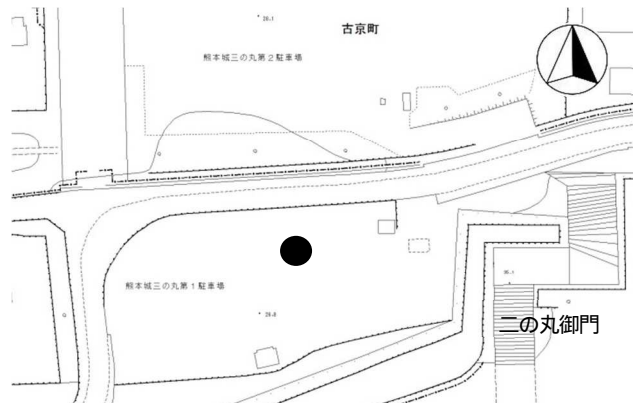
#### (15) 電気設備工事立会

原因：電気設備工事(文化財保護法第93条)

期日：平成27年3月16日

方法：三の丸駐車場に設置された電気設備補修のため掘削工事が行なわれた。周辺は、化血研移転後整備された塀があったが、現在は撤去され植物による生垣が設けられている。電気設備も整備時に設けられたもので、掘削部分が現代の整地層に収まる可能性が高いと判断されたため工事立会を行なった。

成果：掘削規模は1m×0.5mの平面で深さは60cm程度である。山砂を多く含む表土下は割栗石が充填



電気設備工事位置図(1/2500)

されており、塀を復元した際に製作した瓦が出土した。この結果から、掘削は現代の整備の中で収まっており、遺構への影響は無いと判断した。



### 3. 史料調査

熊本城・城下町に関する総合的な調査研究と報告書作成の基礎作業として、古文書・絵図・古写真等の史資料の所在を確認し、収集・目録化を進めた。

#### (1) 主な調査先

平成 26 年 7 月 31 日、8 月 27 日、平成 27 年 3 月 11 日、3 月 13 日 熊本市立熊本博物館

平成 27 年 3 月 2～4 日（予備調査）国立国会図書館、国立公文書館、防衛研究所、宮内公文書館、東京大学史料編纂所

\* 熊本市歴史文書資料室で収集されている永青文庫細川家文書、熊本県立図書館所蔵文書等のマイクロフィルムを随時調査研究に利用している。

#### (2) 主な成果

・熊本博物館に所蔵されている熊本城・城下町絵図等と西南戦争、陸軍関係文書等計 22 点の現物確認・撮影を行なった。

・東京での予備調査では、明治以降の古写真や陸軍関係文書等 58 点の閲覧（一部撮影）を行なった。なかでも、「熊本城郭及市街之図」（国立国会図書館蔵）は、明治初期の熊本鎮台による建物利用状況を示す重要資料であることが確認できた。

### 4. 委員会運営

#### (1) 委員会の目的

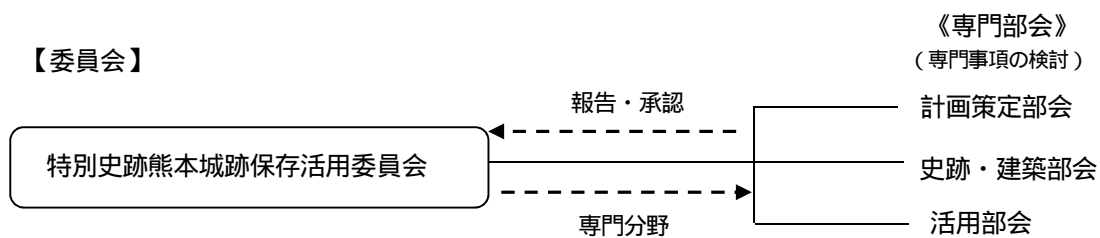
今後の熊本城の保存と活用のあり方について、文化財保護、魅力づくり及び地域の活性化などの観点から、幅広く総合的に検討する。

特別史跡熊本城跡保存活用委員会委員名簿（平成 25・26 年度）

（50 音順、委員長、委員長代理）

氏名	役職等	分野	専門部会
伊東 龍一	熊本大学教授	日本建築史	史跡・建築
伊東 麗子	樹木医	植物	計画策定
今村 克彦	熊本市文化財保護委員	考古・史跡	計画策定 / 史跡・建築
北野 博司	東北芸術工科大学 歴史遺産学科長	考古学	史跡・建築
千田 嘉博	奈良大学学長	考古学	計画策定
瀧井 眞一	公 募	公 募	活用
武本 純一	熊本市中心商店街等連合協議会会長	地元地域	活用
田中 哲雄	日本城郭研究センター名誉館長	石垣・城郭	計画策定 / 史跡・建築
富田 紘一	熊本市文化財専門相談員	考古学	活用
永田 求	熊本県文化協会常務理事	文化振興	活用
鍋島 幸一	公 募	公 募	活用
平井 聖	東京工業大学名誉教授	日本建築史	
松本 寿三郎	熊本大学名誉教授	歴史学	計画策定 / 活用
松山 正明	熊本商工会議所専務理事	地域活性化	活用
丸野 香代子	株式会社「談」代表取締役(熊本経済同友会)	地域活性化	活用
毛利 秀士	一新校区自治協議会会長	地元地域	計画策定 / 活用
山尾 敏孝	熊本大学教授	土木遺産学	史跡・建築
吉丸 良治	熊本県文化協会会長	文化振興	
渡辺 勝彦	元日本工業大学学長特別補佐兼教授	日本建築史	計画策定 / 史跡・建築

平成 26 年 4 月現在の役職等で記載



特別史跡熊本城跡保存活用委員会（平成 25・26 年度）組織図

（2）審議内容

a. 委員会

特別史跡熊本城跡保存活用委員会

第 1 回 平成 27 年 3 月 23 日（月）

- 議 題
- ・各専門部会の検討事項について
  - ・委員会要綱改正について
  - ・絵図・文献部会設置について

出席者 平井委員長、伊東（龍）委員、今村委員、瀧井委員、武本委員、田中委員、永田委員、鍋島委員、松本委員、松山委員、毛利委員、山尾委員、渡辺委員  
（オブザーバー）熊本県文化課

## b. 専門部会

### 計画策定部会

第1回 平成26年9月2日(火)

議 題 ・特別史跡熊本城跡保存管理計画改訂について

出席者 今村部会長、伊東(麗)委員、田中委員、松本委員、毛利委員、渡辺委員  
(オブザーバー)平井委員長、熊本県文化課

第2回 平成26年12月2日(火)

議 題 ・特別史跡熊本城跡保存管理計画改訂について

出席者 今村部会長、伊東(麗)委員、千田委員、田中委員、松本委員、毛利委員、渡辺委員  
(オブザーバー)平井委員長、熊本県文化課

第3回 平成27年2月9日(月)

議 題 ・特別史跡熊本城跡保存管理計画改訂について

出席者 今村部会長、伊東(麗)委員、田中委員、松本委員、毛利委員、渡辺委員  
(オブザーバー)平井委員長、熊本県文化課

### 史跡・建築部会

第1回 平成26年9月1日(月)

議 題 ・石垣・重要文化財建造物等について

出席者 田中部会長、伊東(龍)委員、今村委員、北野委員、渡辺委員  
(オブザーバー)平井委員長、熊本県文化課

第2回 平成26年12月1日(月)

議 題 ・石垣・重要文化財建造物等について

・総括報告書(整備事業編)について

出席者 田中部会長、伊東(龍)委員、今村委員、北野委員、山尾委員、渡辺委員  
(オブザーバー)平井委員長、熊本県文化課

第3回 平成27年2月10日(火)

議 題 ・石垣・重要文化財建造物等について

・総括報告書(整備事業編)について

出席者 田中部会長、伊東(龍)委員、今村委員、北野委員、渡辺委員  
(オブザーバー)平井委員長

### 活用部会

第1回 平成26年8月4日(月)

議 題 ・市民に親しまれる(身近な)熊本城となるための活用等について

出席者 毛利部会長、瀧井委員、武本委員、永田委員、鍋島委員、丸野委員

第2回 平成27年2月2日(月)

議 題 ・熊本城天守閣について

出席者 毛利部会長、瀧井委員、武本委員、富田委員、永田委員、鍋島委員、松山委員、丸野委員

## 5. 啓発(出版図書・論文・報道・講演等)

### (1) 熊本城調査研究センター出版図書

『熊本城調査研究センター報告書 第1集 熊本城跡発掘調査報告書1 - 飯田丸の調査 - 』2014年11月

## (2) 論文

鶴嶋俊彦

「中世八代城再考」『肥後考古』第19号 肥後考古学会 平成26年7月5日

「鷹峯城再考」『中近世の領主支配と民間社会 吉村豊雄先生ご退職記念論文集』熊本出版文化会館 平成26年10月10日

「水俣城の歴史と構造」『水俣市文化財報告書第5集 水俣城跡 確認調査報告書』水俣市教育委員会 平成27年3月31日

「文安五年相良家政変の実像」『歴史を歩く 時代を歩く』九州大学大学院 比較社会文化研究院 服部英雄研究室 平成27年3月31日

「陣ノ内館跡の構造」『甲佐町文化財調査報告書第3集 陣ノ内館跡』甲佐町教育委員会 平成27年3月31日

美濃口雅朗

「戦争遺跡としての『三烈士碑』の位置付け」『肥後考古』第19号 肥後考古学会 平成26年7月5日

「建築物を伴う九州の近世大名墓(集成)」『第6回 大名墓研究会』大名墓研究会 平成26年10月19日

共著「地域における近世大名墓の成立1 九州」『近世大名墓の成立』大名墓研究会 雄山閣 平成26年10月25日

## (3) 報道

平成25年度

10月2日(水) 「熊本城調査、体制充実へ 熊本市『熊本城調査研究センター』開所」(熊本日日新聞)

平成26年度

6月8日(日) 「考熊本城 守る 活かす 天下の名城 再考の好機」(熊本日日新聞)

6月21日(土) 「城を元の姿に 平成の大修復」(熊本日日新聞)

10月2日(木) 「熊本城調査研究センター所長 渡辺氏(日本工業大名誉教授)が就任」(熊本日日新聞)

10月4日(土) 「時間かけて資料集積 熊本城の歴史的価値高まるか」(熊本日日新聞)

## (4) 講演等

講師	講座名	種別	場所	実施日
美濃口雅朗	本丸御殿の発掘調査	出前講座	市民会館崇城大学ホール	平成26年 5月11日(日)
鶴嶋俊彦	肥後国球磨郡の近世城	第31回全国城郭研究者セミナー	九州大学西新プラザ	8月2日(土)
美濃口雅朗	熊本市の史跡 細川家の墓所	定期講座	埋蔵文化財調査室	9月14日(日)
美濃口雅朗	熊本城の保存と活用	五島市市制10周年記念シンポジウム	長崎県立五島高校メモリアルホール	9月21日(日)
美濃口雅朗	細川大名家墓所 -二つの墓所を考える-	出前講座	市民会館崇城大学ホール	11月27日(木)
鶴嶋俊彦	特別史跡熊本城跡	定期講座	埋蔵文化財調査室	12月14日(日)
美濃口雅朗	慶徳校区の埋蔵文化財 他	ラジオ収録	熊本シティエフエム	平成27年 2月19日(木)

## 6. 寄贈図書・寄贈資料

### (1) 寄贈図書(敬称略)

#### 石川県金沢城調査研究所

- 『金沢御堂・金沢城調査報告書 (金沢城史料編)』石川県教育委員会 1991
- 『金沢御堂・金沢城調査報告書 (金沢御堂史料編)』同教育委員会 1991
- 『金沢城跡 金沢城跡遺構実態調査概要報告書』同教育委員会 1993
- 『金沢城跡を掘る The site of Kanazawa Castle 1998』財団法人石川県埋蔵文化財センター 1998
- 『金沢城跡を掘る The site of Kanazawa Castle 1999』同センター 1999
- 『金沢城跡を掘る The site of Kanazawa Castle 1999 vol.2』同センター 1999
- 『金沢城跡を掘る 2000』同センター 2000
- 『石川県中世城館跡調査報告書 (加賀・能登)』石川県教育委員会 2002
- 『研究紀要 金沢城研究』創刊号～第5号 石川県教育委員会事務局文化財課 金沢城研究調査室 2003～2007
- 『金沢城調査研究パンフレット』1～5 同室 2003～2007
- 『年報』1(平成13・14年度)～5(平成18年度)同室 2003～2007
- 『金沢城史料叢書1 御造営方日並記 上巻』同室 2004
- 『石川県中世城館跡調査報告書 (能登)』石川県教育委員会 2004
- 『金沢城フォーラム 石垣の匠と技』同教育委員会 2005
- 『金沢城フォーラム 石垣の匠と技(記録集)』金沢城研究調査室 2005
- 『金沢城史料叢書2 御造営方日並記 下巻』同室 2005
- 『金沢城いもり堀』同室 2005
- 『よみがえる金沢城1 450年の歴史を歩む』同室 2006
- 『金沢城史料叢書3 金沢東照宮(尾崎神社)の研究』同室 2006
- 『金沢城史料叢書4 金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書2 金沢城跡 三ノ丸第1次調査』同室 2006
- 『別所戸室権現下丁場跡(トイタピラ地区) 現地説明会資料』同室 2006
- 『金沢城跡玉泉院丸南西石垣の修築に伴う解体工事・文化財調査の概要』同室 2006
- 『石川県中世城館跡調査報告書 (加賀)』石川県教育委員会 2006
- 『石川県金沢城調査研究所開設記念 シンポジウム 金沢城と伝統技術』同教育委員会 2007
- 『重要文化財 金沢城石川門(附属右方太鼓塀) 保存修理事業概要』同教育委員会 2007
- 『第4回全国城跡等石垣整備調査研究会記録集』第4回全国城跡等石垣整備調査研究会実行委員会事務局 2007
- 『第4回全国城跡等石垣整備調査研究会資料集』同事務局 2007
- 『金沢城史料叢書5 金沢城代と横山家文書の研究』金沢城研究調査室 2007
- 『金沢城跡河北門復元整備に伴う埋蔵文化財調査の概要』石川県土木部公園緑地課・金沢城調査研究所 2007
- 『研究紀要 金沢城研究』第6号～第12号 石川県金沢城調査研究所 2008～2014
- 『金沢城調査研究パンフレット 金沢城を探る』6～12 同研究所 2008～2014
- 『金沢城調査研究所年報』1(平成19年度)～7(平成25年度) 同研究所 2008～2014
- 『平成20年度 金沢城跡埋蔵文化財確認調査 現地説明会資料』同研究所 2008
- 『金沢城史料叢書6 絵図でみる金沢城』同研究所 2008
- 『金沢城史料叢書7 金沢城石垣構築技術史料I』同研究所 2008
- 『金沢城史料叢書8 金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書』同研究所 2008
- 『金沢城史料叢書9 戸室石切場丁場確認調査報告書』同研究所 2008
- 『よみがえる金沢城2 今に残る魅力をさぐる』同研究所 2009
- 『シンポジウム 江戸城と金沢城の御殿』石川県金沢城調査研究所・石川県金沢城・兼六園管理事務 2009
- 『シンポジウム 天下普請にみる石垣技術』同研究所・同事務局 2010
- 『金沢城跡玉泉院丸遺構確認調査 調査概要』1(2009年度)～4(2013年度) 石川県土木部公園緑地課・石川県金沢城調査研究所 2010～2013
- 『金沢城史料叢書10 金沢城公園整備事業に係る埋蔵文

化財調査報告書 3 金沢城跡石垣修築工事報告書 玉泉院丸南西石垣 (本文編)』同課・同研究所 2010

『金沢城史料叢書 10 金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 3 金沢城跡石垣修築工事報告書 玉泉院丸南西石垣 (資料編)』同課・同研究所 2010

『金沢城史料叢書 11 金沢城の三御門 河北門・橋爪門・石川門』同研究所 2010

『金沢城史料叢書 12 金沢城石垣構築技術史料』同研究所 2011

『金沢城史料叢書 13 金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 4 金沢城跡 河北門 (本文編)』同研究所 2011

『金沢城史料叢書 13 金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 4 金沢城跡 河北門 (資料編)』同研究所 2011

『金沢城史料叢書 14 金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 5 金沢城跡 二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓』同研究所 2011

『金沢城跡 橋爪門復元整備に伴う埋蔵文化財調査の概要』石川県土木部公園緑地課・同研究所 2011

『金沢城史料叢書 15 金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 6 金沢城跡 二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓』同研究所 2012

『金沢城史料叢書 16 城郭石垣の技術と組織』同研究所 2012

『金沢城調査研究 10 周年記念シンポジウム 城郭石垣の技術と組織を探る 金沢城と諸城』石川県・石川県教育委員会 2012

石川県金沢城・兼六園管理事務所・石川県金沢城調査研究所『特別名勝兼六園 栄螺山石垣等修復工事報告書』石川県金沢城・兼六園管理事務所 2012

『金沢城史料叢書 17 金沢城普請作事史料』同研究所 2013

『金沢城史料叢書 18 戸室石切丁場確認調査報告書』同研究所 2013

『金沢城関連城郭等情報連絡会資料集 金沢城関連城郭等の調査・研究』同研究所 2013

公益財団法人文化財建造物保存技術協会『金沢城公園 河北門復元整備工事報告書』石川県土木部公園緑地課 2013

『金沢城史料叢書 19 金沢城普請作事史料 2』石川県金沢

城調査研究所 2014

『金沢城史料叢書 20 金沢城跡 - 石川門附属太鼓堀 - 』同研究所 2014

『金沢城史料叢書 21 金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書』同研究所 2014

#### 大坂城天守閣

『テーマ展 乱世からの手紙 - 大坂城天守閣収蔵古文書選 - 』大坂城天守閣 2014

『大阪の陣 400 年記念 特別展 浪人たちの大阪の陣』同 2014

『大坂の陣 400 年記念 特別展 豊臣と徳川』同 2015

#### 小田原市観光課 城址公園係

諏訪問純・鈴木一史『平成 26 年度 小田原城天守閣特別展 いにしへの小田原 ~ 遺跡から見た東西文化の交流 ~ 』小田原城天守閣 2014

#### 熊本県教育庁教育総務局文化課文化財資料室

『熊本県文化財調査報告第 269 集 熊本城遺跡群古城上段』熊本県教育委員会 2012

#### 熊本県立大学文学部日文資料室

『熊本文化研究叢書第五輯 近世熊本の食品・料理 その二』熊本県立大学文学部日本語日本文学研究室 2008

#### 熊本市都市政策研究所

『熊本都市形成史図集』熊本市都市政策研究所 2014

#### 熊本市役所文化振興課植木分室

『熊本市の文化財 第 44 集 東中原遺跡・山頭遺跡 一般国道 3 号植木バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 1 分冊』熊本市教育委員会 2015

『熊本市の文化財 第 48 集 田原坂 西南戦争遺跡・田原坂 5・6 次調査の概要』同教育委員会 2015

#### 熊本市歴史文書資料室

『熊本市史関係資料集 第 1 集 - 近世 - 』熊本市 1997

『熊本市史関係資料集 第 2 集 神社明細帳』同市 1998

『熊本市史関係資料集 第 4 集 肥後古記集覧』同市 2000

『熊本市史関係資料集 第 5 集 熊本市都市計画事業・産業調査資料 (大正・昭和初期)』同市 2001

#### 熊本大学 60 年史編纂委員会

『熊本大学 60 年史 写真集』国立大学法人熊本大学 2011

『熊本大学 60 年史 通史編』同大学 2014

『熊本大学 60 年史 部局史編』同大学 2014

『熊本大学 60 年史 別編 特別座談学生生活の記憶』同

大学 2014

**熊本大学分学部附属永青文庫研究センター**

『永青文庫研究センター 年報』 第1~5号 熊本大学  
文学部附属永青文庫研究センター 2010~2014

**織豊期城郭研究会**

織豊期城郭研究会 2014 年度金沢研究集会準備会 『織豊期  
城郭研究会 2014 年度 金沢研究集会 織豊期城郭の石  
切場』 織豊期城郭研究会 2014

**東京大学史料編纂所**

大浪和弥・鳥津亮二・山田貴司・金子 拓 『加藤清正文書  
目録 東京大学史料編纂所研究成果報告 2014-1  
2012・2013 年度東京大学史料編纂所共同利用・共同研究  
拠点 一般共同研究「加藤清正関係文書の基礎的研究  
所在調査・編年・目録化」成果報告書』 2015

**名古屋城特別展開催委員会**

名古屋城総合事務所 『名古屋城特別展 天下人への道 -  
信長、秀吉、家康の合戦 -』 名古屋城特別展開催委員会  
2014

**奈良大学文学部文化財学科**

『文化財学報 第32集 三宅久雄先生退職記念論集』 奈  
良大学文学部文化財学科 2014

**南関町教育委員会**

『南関町文化財調査報告書 第14集 坂下城跡(トビノ  
ヲの城) - レクリエーション施設建設に伴う埋蔵文化財  
調査報告書 -』 南関町教育委員会 2014

**日本工業大学**

『ネパールの王宮建築 ネパール王国古王宮調査報告書』  
日本工業大学ネパール王国古王宮調査団 1981  
『ネパールの王宮と仏教僧院 ネパール王国古王宮調査  
報告書 続』 同調査団 1985

渡辺勝彦 『ネパールの仏教僧院 イ・バハ・バヒ修復報告  
書』 日本工業大学 1998

**姫路市立城郭研究室**

『姫路城絵図集』 姫路市立城郭研究室室 2014  
『姫路城石垣の魅力』 同室 2015  
『城郭研究室年報 24号』 同室 2015

**福井市文化財保護センター**

福井市教育委員会 事務局文化課文化財保護センター 『福  
井城跡 福井駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘  
調査報告書』 同教育委員会 2013  
同教育委員会 同センター 『福井城跡 福井駅周辺土  
地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』 同センター  
2013  
同教育委員会 同センター 『福井城跡 学校法人福井  
仁愛学園 仁愛女子高等学校整備に伴う発掘調査報告  
書』 同センター 2013  
同教育委員会 同センター 『福井城跡 福井駅周辺土  
地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』 同教育委員会  
2014  
『開発遺跡発掘調査報告書』 同教育委員会 2014

**松江市歴史まちづくり部まちづくり文化財課松江城国宝  
化推進室**

『松江城調査研究集録2』 同室 2015

**若松城天守閣郷土博物館**

『禁門の変百五十年記念展図録』 同館 2014

(2) 寄贈資料

「御城内御絵図」

寄贈者 狩野 丹秀 氏 2014年11月14日



## ．研究ノート

### 熊本城の「御城内御絵図」

木下 泰葉

#### 序

本稿で紹介する絵図は、江戸中期に作成・使用された「御城内御絵図」と呼ばれる熊本城の天守・御殿・櫓等の平面を描いた図面である。本図は平成 26 年 11 月 14 日、喜多流能楽師として知られる狩野丹秀氏より、熊本市に寄贈された。狩野家は藩政時代、熊本藩主細川家のお抱え絵師であった<sup>1)</sup>。狩野家の「先祖附」によれば、四代成信のときに来熊し、五代弘信まで正式に藩に召抱えられることはなかったが、たびたび絵の御用を命じられていた。六代師信のとき、合力米五人扶持、のちに拾人扶持、銀二十枚を下され、屏風・掛軸を多数任されたほか、絵図所・差物帳所などの責任者となつたとされる。

#### 「御城内御絵図」の概要

「御城内御絵図」は楮紙を継いで描かれた大きな図で、縦（南北）357 c m、横（東西）323 c mである。現状では縦八つ、横六つに折り畳まれている。縦 60.8 c m、横 40.0 c mの柿渋紙の表紙（展開した場合南東隅の裏にあたる）に「御城内御絵図」（以下、御城内御絵図と記す）の題箋が貼られている（図 1）。本紙の全面にヘラによって罫を引いた上で平面を書き、建物部分に彩色が施された書絵図である。一間を 4 分（12mm）で表現している。一間が 6 尺 5 寸（約 197 c m）であれば、1/162.5 の縮尺である。2 階以上の建物は、階ごとに平面が作成され、下の階から順に重ねて貼られている。このほかにも、図中には大小数種類の付札<sup>2)</sup>があり、剥落したもの、あるいはその痕跡も多く見受けられる。また、城内の建物の改修等について、紙を貼った上から描き直したり、新規に建てたものを描き加えたりしていることから、一定期間作事所で利用されていた原本であると考えられる。



図 1 御城内御絵図表紙

記載範囲は熊本城の本丸部分（天守・本丸御殿・平左衛門丸・数寄屋丸・西竹の丸・東竹の丸・竹ノ丸）及び櫓方会所・西出丸・奉行所で、本丸では天守・御殿・櫓の平面を詳細に描いた図面となっている。一方、櫓方会所・御蔵方会所・御奉行所は米蔵・櫓の平面と塀・門を記すのみで、会所等の建物の平面は省略されている。

今回寄贈された原本のほかに、写とみられるものを現時点で 2 点確認している。一つは昭和 9（1934）年に魚住景雄氏によって写され、現在は熊本博物館に所蔵されている「城内御絵図」である<sup>3)</sup>。本紙注記に「明和六年製 作者不明 昭和九年三月 熊本市南千反畑町 魚住景雄謄写」とある。

もう一点は奈良文化財研究所所蔵のガラス乾板による写真で、撮影された範囲は西出丸や奉行所を除いた本丸中心部のみである。狩野氏寄贈のものとは筆跡が異なり、石垣の高さの記入漏れなどが見られることから、原本の写と考えられる。このガラス乾板に映った図は、現在のところ行方を確認することができない<sup>4)</sup>。しかし、原本で剥落のため紛失してしまった付札をこのガラス乾板で確認することができ、貴重である。

熊本城や城下を含めた熊本城に関する絵図は多く残されているが、御城内御絵図のように、城内の建築物の平面を描いたものは少ない。そのため、写を含めたこれらの絵図は、長年熊本城跡の保存整備事業において重要な根拠資料の一つとして位置づけられてきた。

御城内御絵図の作成意図と作成年代

絵図の全体を第2図に示した。次の第3~6図は絵図下部の付箋1~4である。

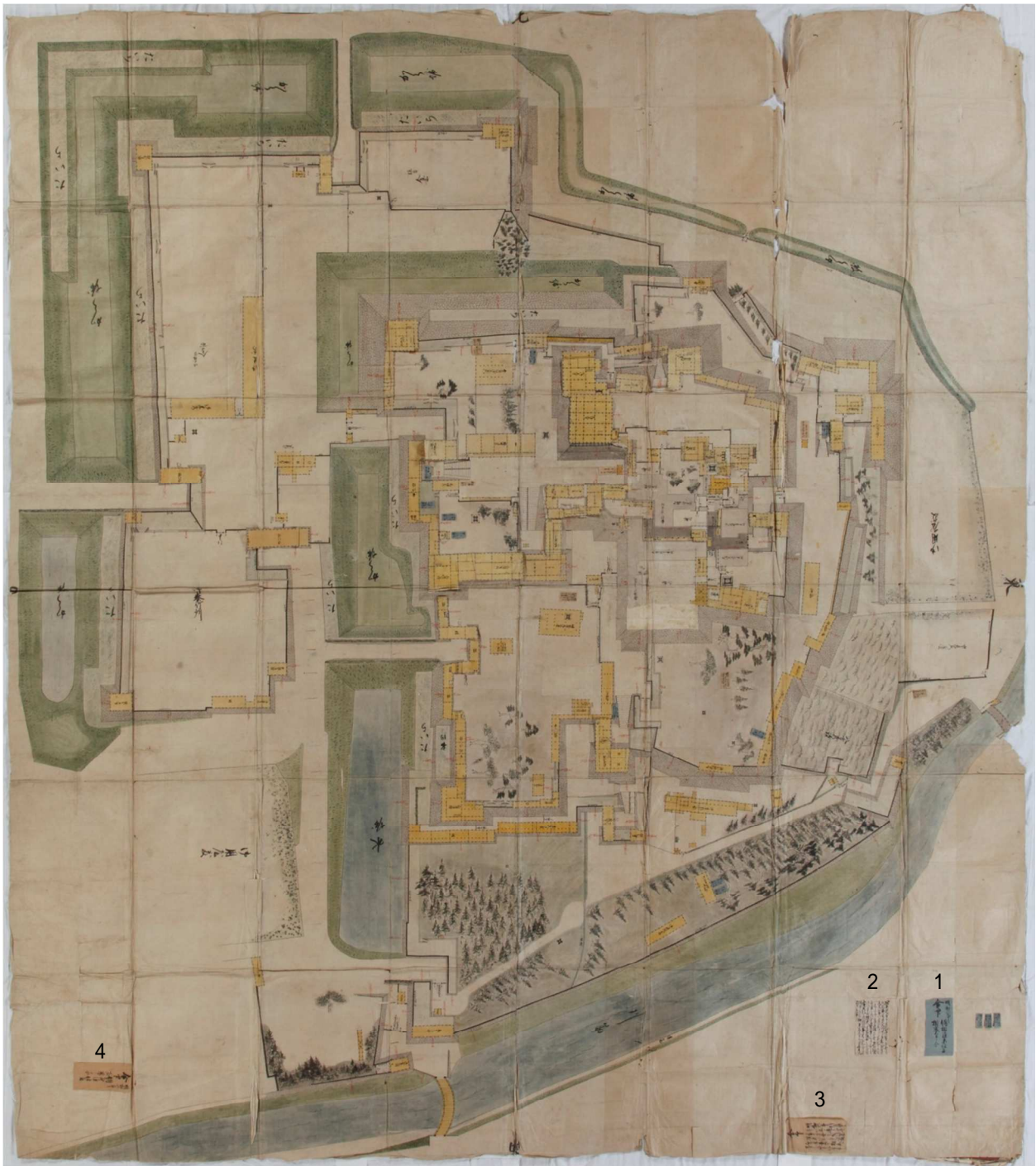
付箋1~4を解読したものを以下に示す。

付箋1(藍鼠色)

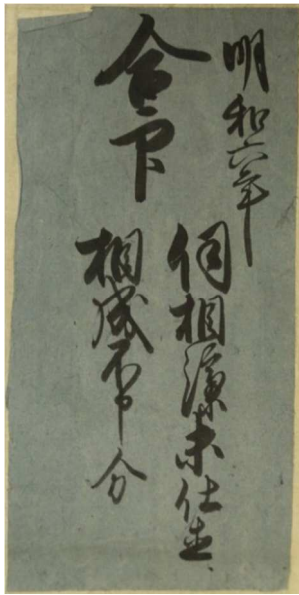
明和六年 合印 伺相済未仕直相成不申分

付箋2

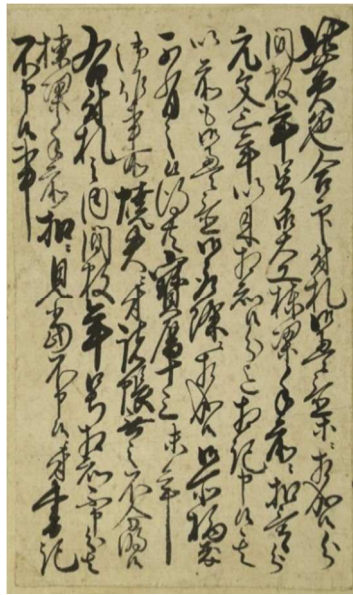
此黄色合印付札御置置等二相成候分、間数・年号御大工棟梁手前二扣置候分、元文三年以来相知候分迄相記申候、其以前も御置置御取除二相成候御所柄茂可有之候得共、宝暦十三末年御作事所焼失二付、諸帳無之不明候、右付札之内間数・年号相知不申分者、棟梁手前扣二見当不申候二付、書記不申候事



第2図 御城内御絵図



第3図 付箋1



第4図 付箋2

付箋3

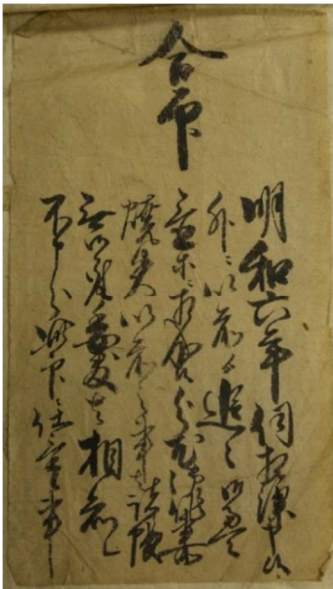
合印 明和六年伺相済申候外二、以前より追々御置置等二相成候分、尤御作事所焼失以前之事者諸帳無御座、委敷者相知し不申分、此印二仕置候事

付箋4

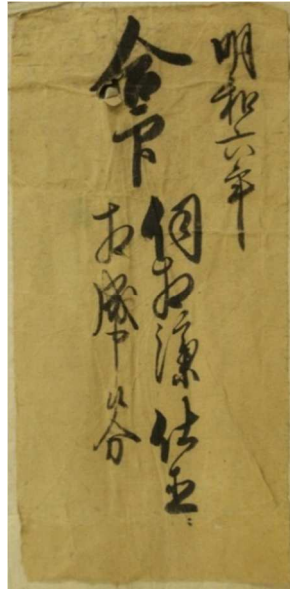
明和六年 合印 伺相済仕直二相成申候分

この1~4の付箋は絵図中に付されている諸所の付札の種類を区別するための凡例となっている。

付箋1から見ていくと、「伺相済未仕直相成不申分」とあることから、明和6年に何らかの「伺」がなされたが、まだ「仕直」が済んでいない部分を藍鼠色の付札で示した、ということが分かる。この種の付札の例として、平左衛門丸のおさかなべや御着部屋御檜の部分に付されているものには「腰板取除<sup>すき</sup> 灰塗下ヶ出来候筈」(第7図)とある。つまり、檜の腰板を撤去し「灰塗下ヶ」とすることが明和6年に「伺」として出され、この図を作成した段階では未だ完了していなかったと考えられる。

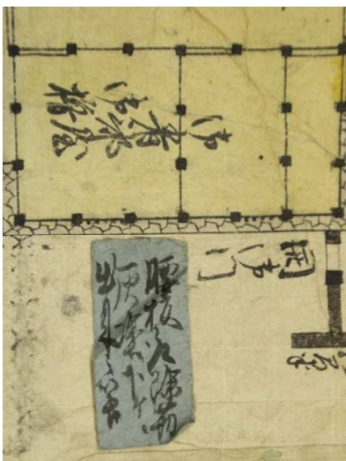


第5図 付箋3



第6図 付箋4

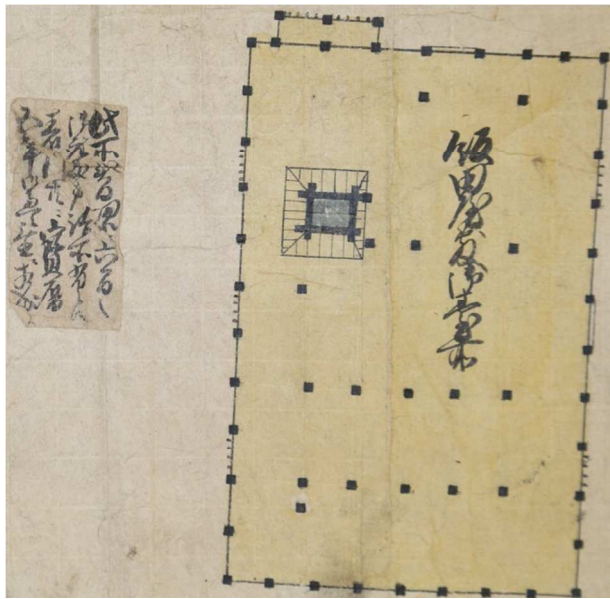
次に、付箋2には「此黄色合印付札御置置等二相成候分」とある。また、付箋3には「明和六年伺相済申候外二、以前より追々御置置等二相成候分」とあり、付箋2の「此黄色合印付札」が付箋3を示していることが分かる。この付札



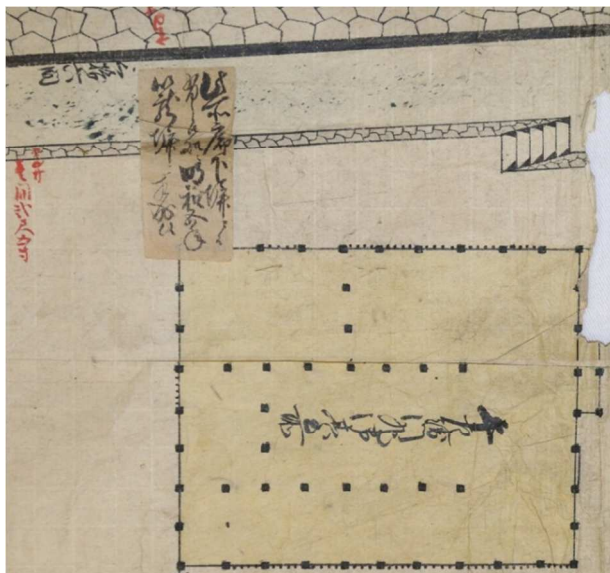
第7図 御着部屋御檜部分

は「御置置」、つまり解体された建物の間数・年号を記している。その詳細について、付箋2によれば、間数・年号は大工棟梁の手元に控えてあったものをもとに、元文3(1738)年以降に解体したと判明する建物を記した、とある。また、それ以前にも解体した建物もあるが、宝暦13(1763)年に作事所が焼失したために諸帳がなく不分明であり、棟梁の手元にある控えの帳簿にないものは間数・年号を記さなかったとある。

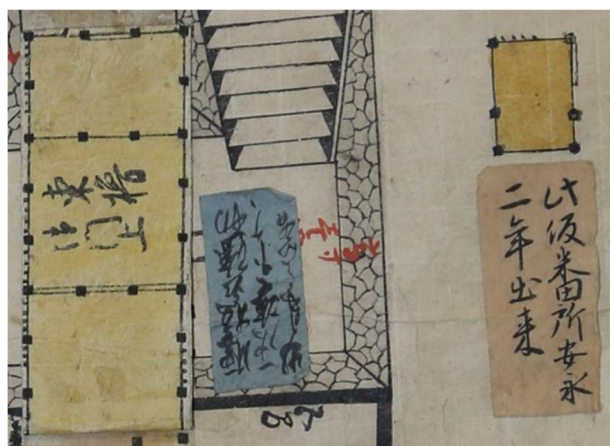
この種の付札としては、飯田屋敷御台所北に「此所式間梁六間之御座敷方詰所有之候、表門共二宝暦五年御置置二相成候」(第8図)とある。また、飯田丸の元塩蔵西側には「此所六間梁拾貳間庇木御蔵有之候、明和九年御置置二相成候事」とある<sup>5)</sup>。この部分は本紙に貼紙がされており、下には確かに東西12間、南北6間の建物の平面が描かれている。恐らく、図の作成時点ではこの建物は存在しておりこの図にも描かれたが、明和9年の段階で解体したため、上



第8図 飯田屋敷台所北側



第9図 平左衛門丸塀部分



第10図 東竹ノ丸部分

から紙を貼って訂正し使用し続けたのであろう。

付箋4は明和6年に建物の改修の「伺」が出され、完了したものを示している。例えば御肴部屋檣から宇土檣へ続く塀に「此所廊下塀二而有之候処二、明和五年籠塀二相成候」(第9図)と付札がある。また、東竹ノ丸に「此飯番所安永二年出来」(第10図)と付札があり、新たに安永2年に飯番所が建てられたことが判明する。この付札は他の付札と筆跡が異なっており、飯番所が立てられた後に図に書き加えられたとみえる。

以上から御城内御絵図の作成年代を考察すると、平左衛門丸での廊下塀から籠塀への改修が図に反映されていることから、作成されたのは明和5年以降であろう。明和6年に「伺」が出されたのと同時に作成された可能性も考えられる。また、飯田丸において明和9年に解体された蔵が描かれ、その上に紙を貼って修正していることから、図が描かれたのは明和9年より下らないと考えられる。また、安永2年に建てられた飯番所が描かれている。図が作成された後一定の期間、新たに建てられた建物を描き加えたり、貼紙によって修正したりしながら使用された。

本丸御殿の一階の部分は、平面が見えない。小広間部分には糊跡があり、一階部分を描いた貼紙を失ったためとみられる。ただし、この図を昭和9年に謄写したとされる「城内御絵図」には本丸御殿一階の平面も描かれていて、欠落を補うことができる。このほか、御城内御絵図が示す様相については、すでに述べたところがあるが<sup>6)</sup>、その他さらに考証する必要があり、今後の課題としたい。

次に、御城内御絵図の作成の目的だが、まず熊本城内の全建物の把握が挙げられる。しかし、多くの付札があるように、単なる平面図に留まらない。特に元文3年以降の城内の改修履歴を確認するためと、明和6年に「伺」として出した改修予定の進捗状況を示すため、の2点が作成の目的として挙げられる。この背景には、宝暦13年の作事所の焼失によって以前の記録が失われてしまったことがある。また、明和6年の7月28日には熊本で大地震が発生しており、震災による城内建物の破損が生じていた可能性も指摘できる。ただし、地震による被災状況については、現在他史料で確認できていない。

## 結

以上のように、明和 5 年の平左衛門丸の塀の改修が反映されており、明和 9 年に解体された蔵が描かれていることから、御城内御絵図はこの期間に描かれたといえる。

金沢城の場合、城内建物の保守管理や新築・再建の業務は作事所が担い、そこで召抱えられていた大工らが設計、絵図作成、工事費用見積もり、資材調達と検査などの業務を行っていた。金沢城の作事所には「絵図所」と呼ばれる部屋があり、指図や計画図だけでなく、城内建物の現状を記録した建物配置図（「御建物図」）も作成されたとされる<sup>7)</sup>。

また、姫路城では天守や御殿の平面を描いた「播州姫路城図」が、姫路城主本多家に家老として仕えた中根家に伝わっている。絵図には堀や石垣の寸法、建具の位置・種類などが詳細に記されていることから、作事方に関わる図面と推察されている<sup>8)</sup>。

以上のように、他藩でも作事方が城内の建物の平面や配置図を作成・使用した事例が見られる。今回の熊本藩の御城内御絵図も作事所の火災によって焼失した記録を補う目的を有していることから、作事所に関わる図面と考えて良いだろう。

現在知られている熊本城に関する絵図の多くは、城下町を含む家臣団の屋敷割を描いたものや、幕府に提出する修補願絵図の写、城域と域内の建築物の景観を描いた絵図である。熊本城の建物の平面図が花畑御殿を除いては部分的なものしか残されていないことは前述した通りである<sup>9)</sup>。

今回紹介した御城内御絵図は建物の平面と配置を把握することができるだけでなく、付札から城内の建物の変遷を知ることができ、貴重なものである。熊本藩の作事所は宝暦 13 年に焼失し、幕末に至るまで大小の出火を繰り返している。作事所に関する記録が乏しいなかで、御城内御絵図は今のところ 18 世紀後半の熊本城内の状況を確認することのできる唯一の史料である。

御城内御絵図の性格を位置づけるには、作事所焼失からの経緯や明和 6 年の地震と「伺」の関係について、熊本藩庁の記録をはじめとした史料を収集・検討する必要があるだろう。また、この図が狩野家に伝わった経緯も、狩野家が細川家のお抱え絵師であったことを踏まえて調査する必要がある。

なお、この御城内御絵図は平成 27 年度に修復する予定であることを申添える。

## 註

1) この狩野家は、加藤清正の時代に熊本で活躍した狩野派とは異なる一派である。

「肥後の近世絵画史概説」熊本県立美術館編『肥後の近世絵画』1979 年、新熊本市史編纂委員会編『新熊本市史 通史編 第四巻 近世』2003 年

2) 後掲の付箋 2 に「付札」とあるので、以下本稿ではこれを用いる。

3) 北野隆編『城郭・侍屋敷古図集成 熊本城』至文堂 1993 年

4) 熊本市熊本城総合事務所『特別史跡熊本城跡本丸御殿復元整備事業報告書 大広間・大台所・数寄屋』2009 年

5) 奈良文化財研究所のガラス乾板より。狩野氏寄贈の絵図の付札は剥落により紛失したとみえる。

6) 熊本城調査研究センター『熊本城調査研究センター報告書第 1 集 熊本城発掘調査報告書 1 飯田丸の調査』2014 年

7) 石川県金沢城調査研究所編『金沢城史料叢書 6 金沢城全域絵図と三御門絵図 絵図でみる金沢城』石川県金沢城研究所 2008 年

8) 姫路市立城郭研究室編『姫路城絵図集』姫路市立城郭研究室 2014 年

9) 藩主の邸宅であった花畑御殿については、平面を描いた絵図が永青文庫に数点伝わっている。これらの絵図も本紙の全面に四分(12mm)

または六分(18mm)で罫が引かれている。間取りや柱の位置のほか、建物の瓦葺・柿葺の区別を色分けで示してある。

熊本大学文学部附属永青文庫研究センター編『永青文庫叢書細川家文書 絵図・地図・指図編』吉川弘文館 2011 年

# 新史料「熊本城郭及市街之圖」

鶴嶋 俊彦

## 1. 本図の概要

当センターでは平成 27 年 3 月に国立国会図書館所蔵の熊本城関係史料の調査を実施した。今回紹介する史料は、この調査によって新たに確認できた地図である（請求番号 Y G 913 - 1616）。地図は縦 107 センチ、横 107 センチの大きさで、端裏に「明治十四年四月四日写 陸軍工兵軍曹仁村俊徳」とあるように明治 14 年（1881）に作成された写本である。表面の左下隅には「元製図 陸軍大尉諏訪親良・陸軍曹長福嶋知新・陸軍々曹仁村俊徳」とあり、仁村のほか 2 名の軍人が製図に関わっている。このうち上官の諏訪は、1849 年和歌山生まれの士族で、明治 5 年に陸軍省築造局の十二等に仕出し工兵畑を歩むことになり、翌年に陸軍少尉に任官となった人物である。明治 30 年には工兵第三方面対馬支署長となり、芋崎砲台の大改築などを担当したという<sup>1)</sup>。陸軍省職員録によれば、明治 9 年 12 月の工兵第六小隊時代には名前がなく、同 11 年 6 月の職員録から工兵第三大隊第二中隊長の中尉として確認できるのでこの時期の着任と考えられる。同 12 年 4 月の職員録では大尉に昇級している<sup>2)</sup>。

地図の図幅の多くを熊本城下までを描いた縮尺五千分の一の「市街図」が占め、右下隅に熊本城跡部分の測量図である縮尺二千四百分の一の「城郭之図」が加えられている。両図を一枚に仕立てた当地図は、明治 12 年 5 月に上記三名によって製図・編集された地図（以下、「原図」と呼ぶ）とみられ、「図解之符」とする地図記号凡例部分末尾には次の付記がある。

城郭測量以来年所ヲ径ルヲ以テ建家ノ位置等現象ト稍ニ異ル所ニアレトモ元図ニ倚リ其俟之ヲ謄写ス 此画図中特ニ量滯ヲ施セシ所ハ未タ測量セサルヲ以テ之ヲ闡明ニ知シメンカ為ナリ

熊本城を測量してから経年していることから建家の位置などに現状と少し異なるところがあるが、元図をそのまま謄写した。また、量滯（ケバ）で表記したのは未測量部分であることが簡明に分るようにしたためと記す。付記に「城郭測量以来」とあり、「市街図」では明治 11 年竣工の京町「熊本裁判所」、通町筋に「熊本病院」「医学校」、そして城郭本丸部分に明治 11 年建設の本堂が確認できるなど、最新の施設名が記入されているので、この付記は専ら「城郭之図」を対象としたものと考えられる。

上記の諸施設建設の年次から、「市街図」の成立は明治 11 年 6 月から同 12 年 5 月までと推定できる。衛戍主衛・同哨兵・警備線・守衛兵・同哨兵の記号とその凡例が異筆で追記してあり、これが「市街図」の主題となっている。したがって、当地図は、明治 14 年時点での熊本鎮台の守衛位置を具体的に明示するための地図として、明治 12 年の「元製図」者の一人であった仁村軍曹が原図を謄写したものと推定できる。

本図には幅 2 センチのヘラ目痕があり、謄写は旧来の製図法が採用されている。縮尺が五千分の一であることからヘラ目の 1 目は 100m に相当する。下端にあるメートル表記の縮尺に合わせて製図したものと判断される。図中には標高を細かく落としてあるが現在の標高に比べると 2.5m ~ 4.0m 程度高い数値となっている。使用した標高基準点の違いか、単なる誤差か、今は確認できていない。図幅の一角に磁北の方位があり真北との「偏角 4 度 5 秒」が記載されているように、磁北での測量を行っていることが分る。陸軍の工兵科では測地や野堡、写景などを教えており<sup>3)</sup>、原図の「市街図」部分も近代的な方法と精度をもった技術で測量され、製図されたものと考えられる。現在の地形図との比較でもほぼ一致していることもこれを支持している。

## 2. 地図の内容

次に本図に描かれている内容について、地区毎に確認検討していくが、描かれている城郭建造物については、原則、江戸中期の作成になる「御城内御絵図」（熊本市蔵）にある名称を使用する。

(1) 本丸中心部

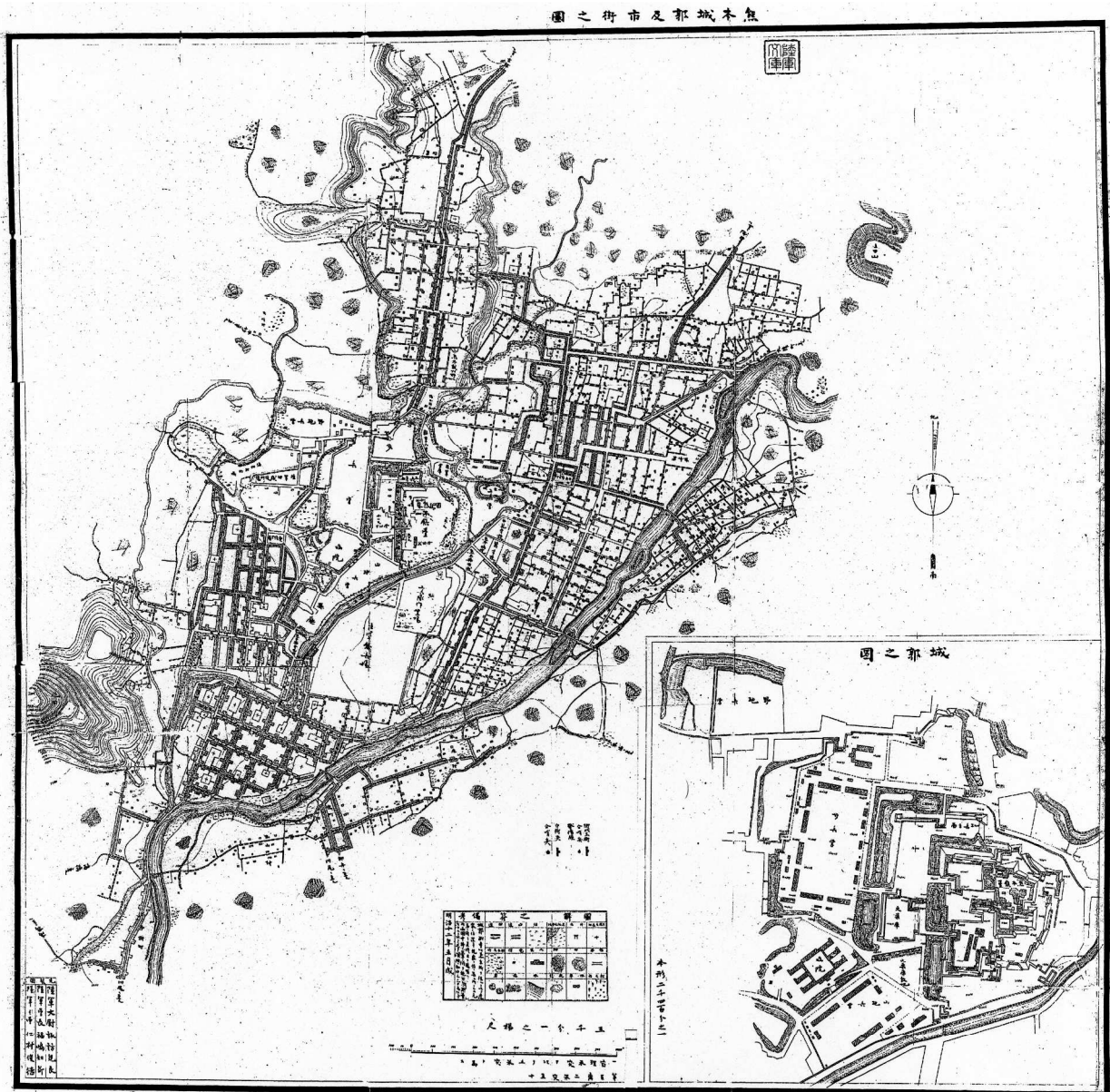
「城郭之図」では、その図名が示すように大天守・小天守・御裏五階櫓のほか、曲輪の北・東辺の多聞櫓など、明治以降にも塁線上に残されていた建築がそのまま描かれている。大天守前に「熊本鎮台」とあり、鎮台本営の所在を示す。御殿も描かれているが、大広間や大台所の一部の部屋が記載されずに闇り通路が露天となっている。元図が作成された時点で本営の使い勝手のため当該部分が撤去され改修されたのか、或いは通路を描くために上部の部屋を省略する意図であるのか、何らかの理由を考える必要がある。

「市街図」の方は小縮尺でもあり城郭部分では省略が多いが、大天守台には「倉庫」があり、天守前広場に明治11年建築の平面コの字形の鎮台本営が描かれている<sup>4)</sup>。

平左衛門丸

「城郭之図」には元平左衛門丸五階櫓(宇土櫓)・古外様御櫓(続櫓)・御肴部屋御櫓が描かれる。明治4年6月に鎮座した加藤神社は、熊本鎮台本営の本丸移転に伴い明治7年9月に城外へ移転していて門前の茶屋とともに地図には存在しない。

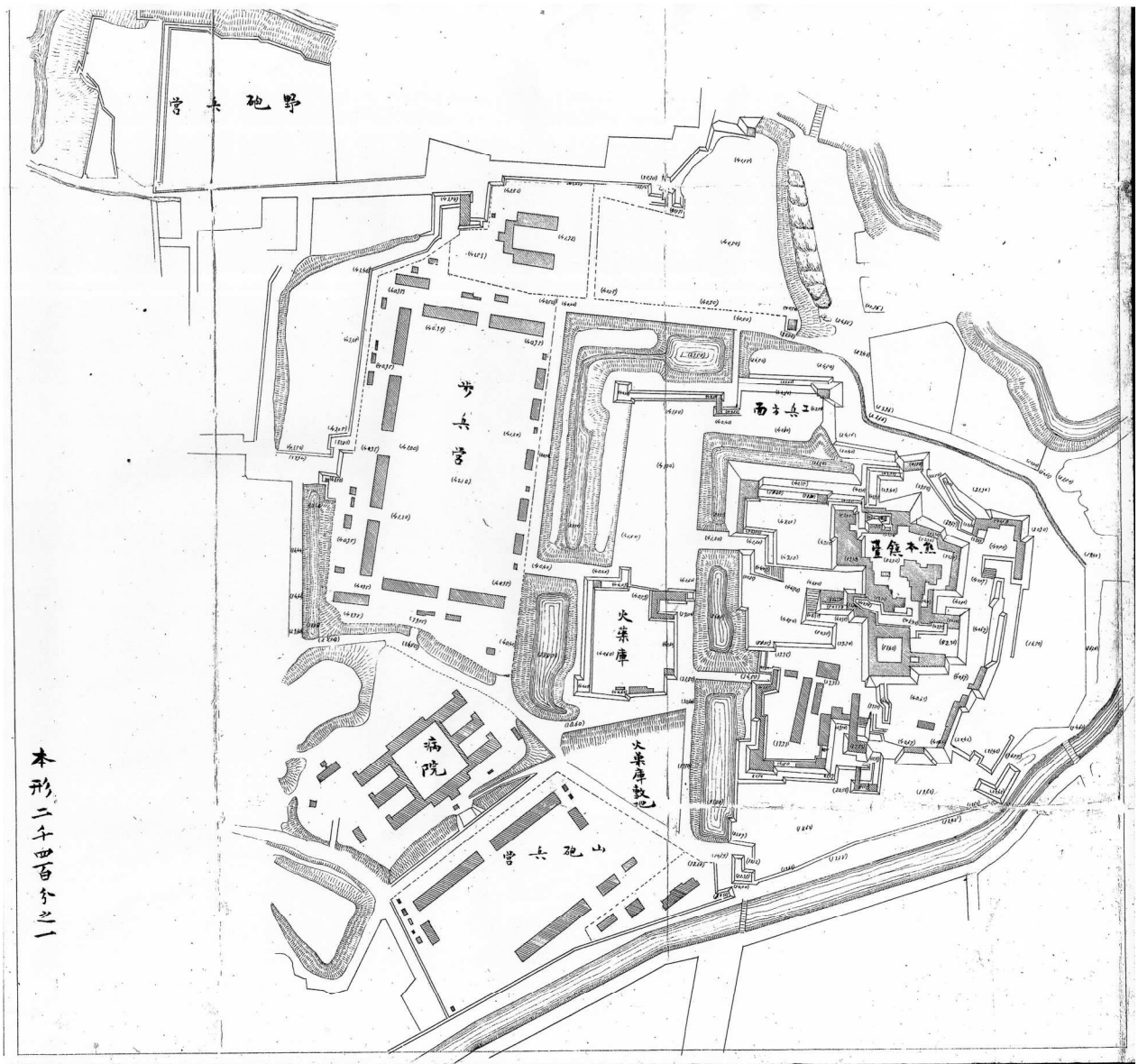
「市街図」では、本丸への通路と天守台の西下に「主衛」と同哨兵の記号が記される。



第1図 熊本城郭及び市街之図(全)







第3図 「城郭之図」

### 数寄屋丸

「市街図」・「城郭之図」ともに、御数寄屋丸櫓御門・長御櫓・三階御櫓・五階御櫓・二階御広間・地蔵櫓御門などがまったく描かれず、石塁の表現もされていない。元図製作の時点で建物は撤去されていたと考えられる。明治10年、熊本での西南戦争戦闘場を撮影した写真家長谷川吉次郎の数寄屋丸写真によれば<sup>5)</sup>、上記建物は見えず、曲輪内にはバラック状の小屋が建ち並んでいて、三階御櫓跡の石塁上には号砲としていた増永砲二門が据えてあり<sup>6)</sup>、石塁の改変はなかったように見える。ただし、写真には砲台に上がる石段が確認できるが、江戸時代の「御城内御絵図」にある階段とは位置が異なる。

### 飯田丸

「城郭之図」には、虎口にあった元札櫓御門、茶御櫓、五階御櫓、札櫓御門、元塩蔵を描く。塁線上では百間御櫓や五階御櫓、隅御櫓、平櫓、三階御櫓などの建物を描いているが、西櫓御門とその北に接続していた多間櫓は描かれていない。曲輪中央には「御城内御絵図」に見える飯田屋敷御台所や御側組・御持筒組御道具蔵があるが、その南に「御城内御絵図」では見られない長大な南北棟の建物を含む2棟が描かれている。

西櫓御門の部分には「向合門」と記載があり、構造不明だが門を置いていたことが分かる。この門が最近ま



第4図 現在の地形図(「城郭之図」該当部分)

で現地に保存され現在移転保管されている「西櫓御門」と呼ばれていた門である<sup>7)</sup>。明治になり櫓部分を撤去し屋根を架けた構造に改変してあるため、「城郭之図」では図上表現を省略したものとみられる。「向合門」という名称は、南側石塁内に設けられていた「向埋御門」の対面に位置するためと推定される。

「市街図」では上記の曲輪中央の長大な建物は「武器庫」とあり、西南戦争の最中も飯田丸に「武器の支給場」が置かれていたことが戦闘日記に確認できる<sup>8)</sup>。その規模が歩兵営や砲兵営に見られる建築と同形同大であることから近代に至って建築された軍施設であろう。

#### 東竹の丸

「城郭之図」では塁線上に南から元硫黄御櫓、田子御櫓、七間御櫓、拾四間御櫓、四間御櫓、源之進御櫓が建ち並んでいる。その北方の三間御櫓や東櫓御門、御櫓番詰所は撤去されているが、東拾八間御櫓、北拾八間

御櫓、五間御櫓、六間御櫓、不開門櫓、西に少し離れた平御櫓は描かれている。曲輪中央では元硫黄御櫓の北側に「御城内御絵図」にも見えない名称不明の建物がある。

「市街図」では、「東櫓門」と「不明門」(不開門)の二箇所に哨兵を配置している。

#### 竹の丸周辺

「城郭之図」には虎口にあった須戸口櫓や馬具御櫓、御書物櫓のほか、曲輪内にあった御作事所や御鉄砲蔵、要人御櫓などの建物がまったく描かれていない。このうち御書物櫓は西南戦争開戦前の写真に撮影されており、明治10年2月頃までは実在していた<sup>9)</sup>。原図を謄写する段階での意図的な省略か、単なる錯誤か判然としない。なお、馬具櫓門北側石塁に関しては内壁の表現がない。現在もこの部分には石塁内壁がなく、スロープとなっている。

「市街図」では「馬具櫓門」、「冠木門」、下馬橋の記載があるが、須戸口門を「元札門」と誤っている。

#### 西出丸

「城郭之図」によれば、奉行所跡では南大手御門、井樋方御櫓、御客方御櫓、元太鼓御櫓が描かれ、未申御櫓は撤去されている。元太鼓御櫓の位置は東に少しずれて描いている。南大手御門の南側石塁上に鍵形の建物があるが、「御城内御絵図」になく名称は不明である。曲輪内には大きく「火薬庫」と記載する。「市街図」でも「火薬庫」とあり、入口に哨兵を配置する。

「城郭之図」では西大手御門と戌亥御櫓は撤去されていて、その間の石塁も失われているが、北大手御門は存続している。御米蔵2棟があった広い曲輪内に建物は見えない。東方にある櫓方会所の曲輪では櫓方隅御櫓が描かれ、曲輪内には鎮台施設の建築・修繕・監視を任務とした「工兵方面」が置かれている。東北隅にある櫓方隅御櫓は、西南戦争時には櫓は解かれて堡籃を置いた台場となっている写真が残る<sup>10)</sup>。

凡例を参考とすると、西出丸西側と北側の空堀は棒庵坂下の堀を除いて水濠として描き、本丸の西側にある備前堀とその北側に隣接した数寄屋丸西側の空堀もまた水濠の表現となっている。宇土櫓の西・北側の空堀は「乾壕」の表現となっている。

#### 二ノ丸

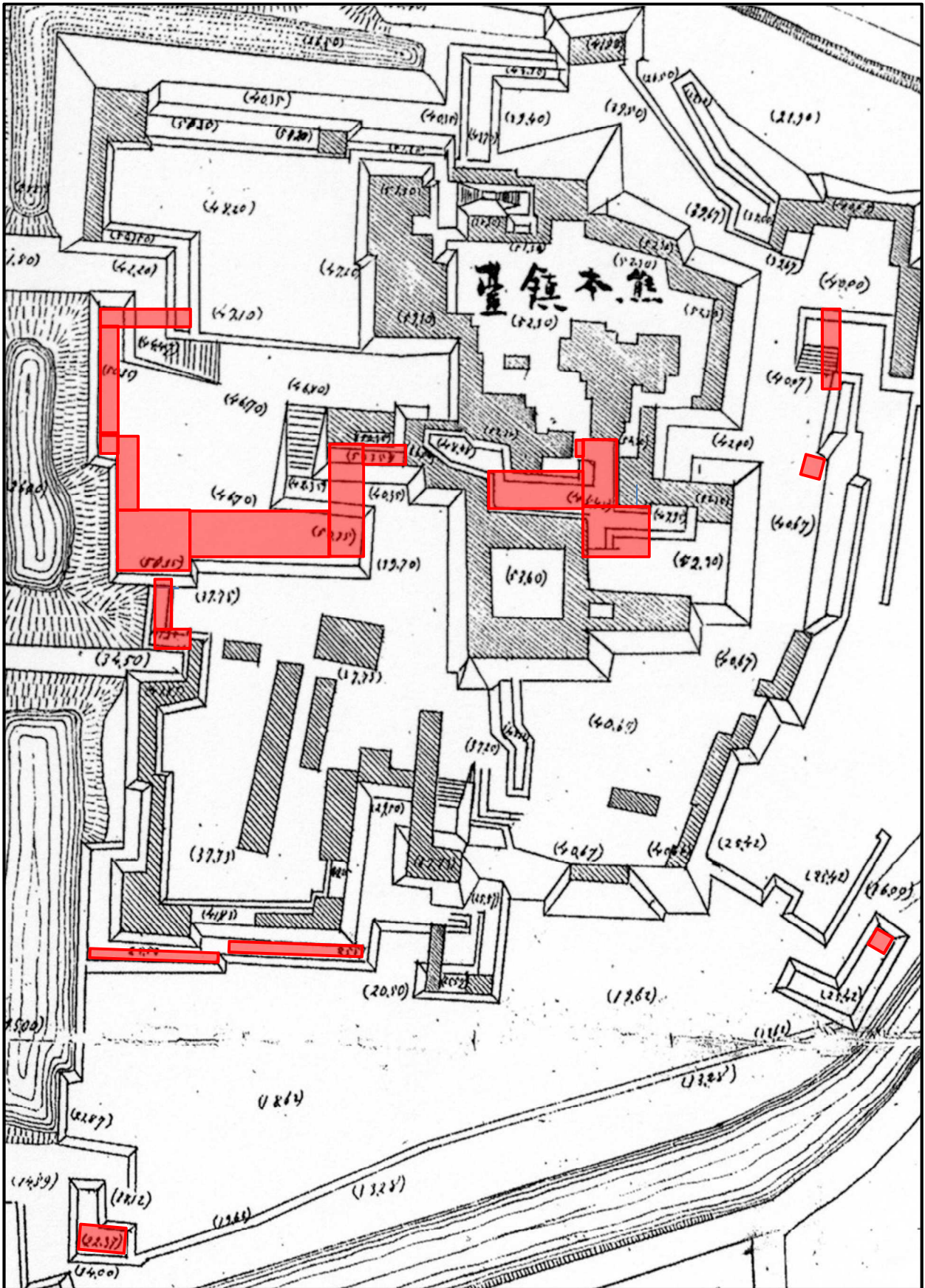
「城郭之図」では広い空間が「歩兵営」となり、外縁を営舎が取り囲んでいる。南側半分が第一大隊、北側半分が第二大隊の営舎で、明治6年から工事が始まり、明治7年に第一大隊営舎が完成、翌8年4月15日に第二大隊の営舎が竣工し屯営が始まる<sup>11)</sup>。第二大隊の営舎のうち4棟は明治9年10月24日の神風連の変で焼失している<sup>12)</sup>が、この地図では建設当初の状態を描かれている。歩兵営の北側にあるコの字形の建物は病院で、その北側の虎口には二ノ丸櫓御門が存続している。病院の東方、現在植物園がある通称監物台は長岡図書屋敷で、北側にあった新堀口二階御門(通称埋門)は既になく、通路も病院側に迂回するように改変されている。監物台北端には「図書預西ノ居櫓」(通称監物櫓)が今でも残るが、「図書預北輪居櫓」の方を描いていて「図書預西ノ居櫓」は描かれていない。謄写の際の錯誤と思われる。

歩兵営西側の虎口に門は描かれず、「長岡山城預御櫓」は撤去されている。この虎口の北側、現在の県立美術館敷地は空白となっているが、細川藩旧家臣の住江氏と田中氏の士族屋敷として依然使用されていたようである。虎口の西方の現護国神社から新町に至る新坂はまだ描かれていない。

「市街図」では、監物台部分が歩兵営に組み込まれていて、現護国神社から新町への新坂が描かれている。

#### 長岡・有吉氏屋敷跡

「城郭之図」では明治9年2月15日に落成した鎮台本病院の敷地となっている<sup>13)</sup>。南斜面には慶宅坂の麓から西方に上って病院玄関正面に至る新坂と病院玄関前の高石垣が描かれる。両方とも江戸時代の絵図に見られないものである。この新坂は現在は使用されずに路肩を構成した石垣だけが残っていて、玄関前の高石垣と共に明治8年頃からの本病院建設に合わせて造成されたと考えられる。



第5図 「城郭之図」中核部拡大図

\* 斜線は存続している御殿や櫓建築

は欠失している御殿や櫓建築

## 櫻馬場・備前屋敷跡

「城郭之図」では備前堀から鞍掛坂下まで明治9年に落成した山砲兵営となっている。台地下の櫻馬場に沿って長大な2棟の営舎や賄の建物が建ち並び、坪井川沿いにも長大な営舎がある。下馬橋側の堀で囲まれた部分は兵営付属の病院である。北東側営舎と賄は神風連の変で焼けたとされるがそのまま描かれている。慶宅坂に至る道を挟んだ備前堀側に「火薬庫敷地」がある。

「市街図」では「山砲兵営」とだけ記載されるが、敷地が古城側の現第一高校グラウンドまで拡大している。

## 三の丸長岡（細川）内膳屋敷跡周辺

「城郭之図」鎮台敷地から飛地となる「二の丸御殿」敷地（現細川刑部邸）全部を野砲兵営としている。当地は明治9年8月に陸軍用地に接收する伺い文書が残る<sup>14)</sup>。敷地内に建物の記載がないのは、まだ兵舎の建築が進んでいない段階であったことを示すとみられる。敷地西側の台地下には水濠の表現があるが、「市街図」では水濠の表現はない。

## 「市街図」の城郭外

本丸東側の台地下の千葉城に「工兵営」、不開門下のかつての米蔵跡（現伝統工芸館周辺）に「陸軍倉庫」、監物台東下に「輜重兵営」があり、磐根橋が架けられてその先の京町台に錦山神社が鎮座し、明治11年に竣工した熊本裁判所がある。

二ノ丸西方の宮内橋を渡った藤崎台には「陸軍因獄徒刑場」があり、北側の段丘崖下は「漆畑射的場」がある。

古城では鞍掛坂南の高台（現第一高校同窓会館）に「一日亭」と記載があり、その下段の現第一高校敷地は「県庁」となっていて、堀を挟んだ正面には「熊本県会議所」がある。県庁西側に「古城堀端」の道があり、古城堀は水濠に描かれるが、その北側に段山近くまで連続していた台地下の濠は表現されておらず埋立てが進んでいることを教える。

新町・古町では街路・街区に大きな変化はなく、新一丁目御門前に「電信局」があり電信中継局となっている。また、明治5年の明治天皇巡幸での宿泊所となった旧御客屋の「会輔堂」は、「学校」となっている。

坪井川以南の山崎地区には広大な「陸軍練兵場」が広がり、花畑屋敷跡は「工兵隊作業場」となっている。手取町から藪内町にかけては、「熊本県因獄」「熊本病院」「医学校」「師範学校」が置かれている。

## 3. 原図の作成年代

本来別葉であった地図が一葉の地図に編集されたのは明治12年5月である。まず、「城郭之図」の元図が作成された年代を考えたい。図解之符にある付記では城郭測量から年月が過ぎ、明治12年には建家の位置などに実際とは異なる所があるが、そのまま使用したとしている。特に「城郭之図」では西南戦争直前に焼失した本丸の天守や櫓、御殿などの諸建築が記載されていて元図の成立年代が西南戦争の開戦前であることが明らかである。

西出丸の西側石塁や西大手御門、戌亥御櫓の撤去は、古写真による解析を行った富田紘一氏の研究によれば明治5年の事跡とされている<sup>15)</sup>。さらに平左衛門丸に錦山神社の姿はなく、明治7年の神社移転後の様子となっていて、二ノ丸の第十三聯隊の兵舎は完成しているので屯営が開始された明治8年4月15日以降となる。鎮台病院は明治9年2月15日に落成し、櫻馬場の山砲兵営も明治9年に落成している所以同年2月以降の測量となる。明治9年の10月24日夜半から翌日にかけて神風連の変が勃発したが、その折には山砲兵営や歩兵営の営舎の一部が放火されているので、元図の成立は神風連の変が勃発した10月中旬頃より以前ということになる。

また、明治9年4月17日に工兵第六小隊が新しく編成され、花畑邸内に営舎を置いた。工兵営の営舎は火災によって移転することになり、「市街図」にあるように千葉城を営舎地とした。測量や製図は工兵部隊の任務で

あり、当図の編集にあたった諏訪親良たちは西南戦争後に工兵第三大隊に配属となった鎮台兵であった。したがって、元図の測量・製図が行われた時期は、工兵第六小隊が編成された明治9年4月17日から神風連の変があった同年10月下旬までのおよそ六ヶ月の間に絞られることになる。さらに、野砲兵営は同年8月から9月にかけて用地取得が進めていることから、明治9年の8月頃から10月下旬が測量や製図が行われた時期と推定できる。

「市街図」では、明治11年に本丸天守前に建設された熊本鎮台本営や明治11年4月に再建される医学校、熊本県因獄などの最新情報が反映して記載されていることから、明治11年から同12年5月にかけて測量や製図が行われたと考えられる。

#### 4. 本図の史的価値

近代以降に製作された熊本の市街図でこれまでに知られている最古のものは、明治13年届出、同14年出版の「熊本全圖」である<sup>16)</sup>。編集人が林 知智、出版人が國武 弘とあり、ともに熊本区の士族である。精度は本地図と同様に高いが、等高線は使用せずにケバ表記となっている。本図との表現上の相違が多く、別途測量して製図された経緯をもつ地図と考えられる。

さて、今回紹介した地図は明治維新後に陸軍で採用されていた近代測量学をもって明治9年に作成されたと推定できたが、現在の地形図と比較してもその精度は高い。近代初頭、陸軍はフランス式の測量学・地図学の知識によって地図作成を進めていた<sup>17)</sup>。本図は近代地図として最初の熊本城測量図或いは熊本市街地図と評価できる史料であり、そこから得られる情報は小さくない。

熊本城には豊富な古写真があることが知られていて、富田紘一氏によって古文書や絵図も勘案しながら城内建築群の消長が解析されている<sup>18)</sup>。しかし、古写真には死角があり、また撮影日が不明なものも多く、研究上の制約となっている。特に「城郭之図」は、謄写が繰り返されて錯誤が看取される部分があるが、元図は明治9年段階で測量され製図されたと推定される地図であり、炎上前の天守や櫓、御殿群が描かれているように、西南戦争直前における熊本城跡の土地利用や建築群の消長の一端が正確な位置情報をもって理解できるという特徴がある。

既存の古地図や古写真、古文書などによってクロスチェックしなければならないが、明治9年段階での具体的特徴を挙げれば、数寄屋丸の建築群の一切が撤去されているものの大半の建築群が健在であったこと。飯田丸の建築群の大半が健在であるのに西櫓御門やその北側の多聞櫓が撤去される改変があり、江戸期の絵図にない長大な武器庫が明治になり追加されていること。手取口の須戸口櫓（平御櫓）が既に撤去されていたらしいこと。西出丸の石塁や未申御櫓・戌亥御櫓が撤去されていること。櫓方会所跡の隅御櫓が健在であること。新堀口二階御門（埋門）が健在であること。などなど、これまで不明確であった建築群の存廃が明治9年の段階で理解でき、今後の研究に寄与するところは大きい。

ところで、西南戦争開戦直前の2月19日の本丸炎上に際して、樺山資紀参謀長が肝胆を砕いて作った「熊本城配備の地図」があり、秘書類の一つとして児玉源太郎副参謀が火中から生命を掛けて持ち出したという逸話がある<sup>19)</sup>。軍事施設の配置を図示した地図は、秘書とあるように当然軍事機密扱いであった。逸話にある「熊本城配備の地図」が今回確認された「熊本城郭及市街之圖」に謄写されている元図の「城郭之図」であった可能性も考えられる。地図のもつ軍事性や貴重性を考える上で象徴的な逸話といえる。

#### 註

1) 唐澤靖彦「工役長 陸軍工兵中尉時尾善三郎」『立命館文学』635, 1-22 2014年

2) J A C A R (アジア歴史資料センター) Ref. A09054296400、職員録 明治十一年六月 職員録 (陸軍三) 改 (国立国会図書館)

RefA09054301800、職員録 明治十二年四月 職員録 (陸軍省) 改 (国立国会図書館)

3) 上掲註1 文献

- 4) 荒木精之編著『写真の先覚者 富重利平』富重利平作品集刊行会 1977 年
- 5) 長谷川吉次郎「熊本天主台ヨリ西南方向」写真 宮内庁三の丸尚蔵館編『明治美術再見 (記録の芸術 山本芳翠とその時代)』所収 (財) 菊陽文化協会 2001 年
- 6) 増永砲は御船の商人増永三左衛門が鑄造し藩に献上した青銅砲で、熊本鎮台では号砲に使用していた。後に本丸南側に移され正午の時報を告げていた。(上掲註4 文献 147 頁)
- 7) 西櫓御門は近代になり櫓部分を撤去して門に屋根を架けた構造に改造されて使用されていた(熊本市教育委員会編『熊本城文献調査報告書』1982 年)。腐食が進行しているため、現在は解体されて移転保管されている。
- 8) 日本史籍協会『熊本鎮台戦闘日誌』東京大学出版会 1977 年
- 9) 富田紘一『西南戦争古写真アルバム』(財)熊本城顕彰会 2007 年
- 10) 富田紘一『西南戦争古写真アルバム』(財)熊本城顕彰会 2007 年
- 11) 新熊本市史編纂委員会編『新熊本市史』通史編第5 巻 近代 熊本市 2001 年
- 12) 「熊本鎮台敷地図」(写) 熊本博物館蔵
- 13) 上掲註10 文献
- 14) J A C A R (アジア歴史資料センター) Ref. C04026791700、明治九年八月「内務へ熊本野砲営地の義云々回答」 J A C A R (アジア歴史資料センター) Ref. C04026797700、「大日記 送達の部 9 月土 陸軍省第一局」(防衛研究所) 「正院へ熊本鎮台野砲営所受取度伺」
- 15) 富田紘一『古写真に探る 熊本城と城下町』肥後上代文化研究会 1993 年
- 16) 新熊本市史編纂委員会編『新熊本市史』絵図・地図 上 近代 熊本市 1993 年
- 17) 山岡光治『地図をつくった男たち』原書房 2012 年 126 頁
- 18) 上掲註15 文献
- 19) 出石猷彦「熊本籠城の実況」『維新史料編纂会 講演速記録』大正6 年(国立国会図書館『近代デジタルライブラリー』)

熊本城調査研究センター年報 1  
平成 25・26 年度

2015 年 5 月

発行 熊本城調査研究センター  
〒860-0007 熊本市中央区古京町 1-1  
TEL (096) 355 2327